

学校法人太田アカデミー

太田医療技術専門学校

厚生労働省指定養成施設

理学療法学科

(夜間課程)

2024年度 シラバス



授業評価の基準

授業では、以下に挙げる方法と基準により授業評価を行う。

1 授業評価の方法

各科目の学修成果は、前期及び後期末に行う筆記試験又は実技試験の得点をもって評価する。科目によっては、受講態度や課題の提出状況、小テスト、中間試験等により数値化した得点（平常点等）を試験素点に加減することで評価する（平常点等を考慮する科目はシラバスに記載する）場合もある。

また、各授業における欠席の上限を定めており、この時間を超えて授業を欠席した者には当該科目の試験の受験資格を与えず、単位不認定とする。

なお、授業開始後 30 分を経過するまでに教室に入室した者は「遅刻」、授業終了の定刻前に教室を退室した者は「早退」とし、遅刻及び早退の累計が 3 回となった場合は 1 回の欠席とする。

2 授業評価の基準

試験の結果（得点）により、以下の基準で評価する。ただし、これとは別に基準を設定して評価を行う場合には別途授業計画（シラバス）に記載し、またその旨担当教員が授業において告知する。

試験の得点	評価と単位認定
80～100点	評価「優」 単位を認定する。
70～79点	評価「良」 単位を認定する
60～69点	評価「可」 単位を認定する。
60点未満	評価「不可」 単位を認定しない。

なお、本試験の得点が60点未満だった者については再試験を実施し、再試験の得点が60点以上だった者については、評価を「可」として単位を認定する。それ以外の者には単位を認定しない。

太田医療技術専門学校

履修区分	必修	単位数	4	開講時期	通年	形態	講義	
開講学科	理学療法学科（昼間課程）				配当時間	60	対象年次	1
科目名	自然科学基礎Ⅰ □ 実務経験のある教員による授業				担当者	佐藤 友彦		
使用教材	いちばんやさしい生理学(成美堂出版)							
科目概要	基礎医学系大学院での研究経験を活かし、入門としての基礎生理学を講義する。本講義では、2年次に行う専門的な生理学に先駆け、生理学の基礎的内容から学び、国家試験に必要な知識の土台をつくる。							
到達目標	1. 生理学を学ぶ意義を理解する。 2. 生理学にかかわる専門用語を理解できる。 3. 国家試験合格に必要な最低限の知識を修得する。							
評価方法 基準	前期及び後期末に筆記試験を行い、60点以上得点した者に単位を認定する。							
成績評価の フィードバック	講義の翌週の講義冒頭で小テストを行い、前回講義の内容の理解度を確認する。小テストで6割未満の成績が続く場合は個別に指導を行う。							
事前準備	□ なし □ あり							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	生理学とは	ヒトの体の仕組みを学ぶ学問 生理学を学ぶ意義	
2	ホメオスタシスとは 成長・発達と老化	体内の環境を一定に保つ仕組み 発生、成長、発達の違い	
3	骨の働き	骨格を作るだけではない 血球を作るのも骨の役割	
4	骨の成長と代謝	骨の成長は骨端線で行われる	
5	骨格筋の構造と収縮の仕組み	骨格筋収縮時の筋原線維の動き	
6	筋収縮の種類	動的運動の筋収縮と静的運動の筋収縮	
7	運動の指令の伝達を筋収縮	大脳から発せられる運動指令と伝達 刺激の強さと筋肉の収縮の関係	
8	筋と腱のセンサー 筋収縮のエネルギー	筋や腱の伸び過ぎを防ぐ 筋紡錘の働きと伸張反射	
9	神経系とは ニューロンと神経の興奮	中枢神経系と末梢神経系の構成 インパルスが伝達される仕組み	
10	シナプスでの情報伝達 大脳皮質の機能局在	神経伝達物質によって情報が伝達される 大脳皮質の機能と部位	
11	大脳辺縁系と大脳基底核の働き	本能的行動を司る大脳辺縁系 運動の調整に関わる大脳基底核	
12	記憶の生理 サーカディアンリズムと睡眠	短期記憶と長期記憶 生体機能は約24時間の周期で変化する	
13	間脳の働き 中脳、橋の働き	視床下部の機能 脳幹の基本的な構造と機能	
14	延髄の働き 小脳の働き	延髄は生命維持活動の中枢 小脳は運動の上達に関わる	
15	脊髄の働き 脊髄反射の仕組み	脊髄は中枢と末梢を結ぶ中継システム 危険を回避、姿勢を維持する仕組み	

回	単元	内容	備考
16	髄膜と脳脊髄液 脳神経の働き	中枢神経を覆う硬膜、くも膜、軟膜 脳に出入りする12対の末梢神経	
17	脊髄神経とデルマトーム 自律神経の概要	脊髄神経が支配するエリア 交感神経と副交感神経の二重支配	
18	自律神経系—交感神経 自律神経系—副交感神経	交感神経の機能、走行と神経伝達物質 副交感神経の機能、走行と神経伝達物質	
19	上行性伝導路 下行性伝導路	伝える感覚によるルートの違い 錐体路と錐体外路	
20	感覚の種類	2つの体性感覚、内臓感覚と特殊感覚、深部感覚	
21	循環とは 心臓の構造と冠状動脈	体循環と肺循環 心臓に酸素と栄養を運ぶ冠状動脈	
22	心臓の刺激伝導系と心電図 心拍数とその調整	刺激伝導系の働きと心臓の収縮 自律神経による調整と静脈還流量	
23	動脈と血流 静脈還流の仕組み	動脈の特徴と走行 静脈の特徴と走行	
24	血圧とその調節 リンパ系の働き	自律神経系と内分泌系による血圧調節 体液の回収と免疫機構	
25	体液の組成と水分出納 体液の酸塩基平衡	体重における水分の割合、体液量の 体液のpHを維持する仕組み	
26	血液の成分と働き 造血の仕組み	血球成分と血漿 血球成分は赤色骨髄で作られる	
27	赤血球の働きと寿命 止血の仕組み	ヘモグロビンによる酸素運搬 止血機構と止血因子	
28	白血球の種類と貪食作用 体液性免疫	5種類の白血球と好中球・マクロファージによる貪食 抗体による免疫機構	
29	細胞性免疫の仕組み	マクロファージやT細胞による免疫	
30	胸腺と脾臓の働き	T細胞の成熟と脾臓での免疫機構	

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	前期	形態	講義	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	30	対象年次	1
科目名	自然科学基礎Ⅱ □ 実務経験のある教員による授業				担当者	戸谷 幸永		
使用教材	なし（講義ごとに演習問題プリントを配布）							
科目概要	理学療法士国家試験において計算問題が出題される傾向が高まっている。 本講義では、国家試験の計算問題を得点源とするために、高等学校までの算数及び数学の復習、理科（物理）の基礎、統計の基礎を取り扱う。							
到達目標	1．四則演算できる（整数・小数・分数）。 2．比について理解できる。 3．三角比の基礎を理解できる。 4．理科（物理）の基礎を理解できる。 5．統計の基礎を理解できる。							
評価方法 基準	学期末に筆記試験を行う。また、受講態度を点数化し、筆記試験の得点に加減する。総合的に60点以上得点した者に単位を認定する。評価基準については、学科の規定による。							
成績評価の フィードバック	試験の採点后、答案を返却する。また、担任を通じて成績優秀者を公表する。不合格者については、学籍番号のみを掲示する。							
事前準備	□ なし ▣ あり 小学校～高等学校で学習した算数・数学を再復習しておくことを望む。							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	中学・高校数学の復習	数学Ⅰ程度までの内容を演習により復習する。	
2	四則演算	整数・小数・分数の四則演算演習	
3	四則演算・文章問題	整数・小数・分数の四則演算演習 平易な文章問題の演習	
4	平方根	平方根の計算・有理化の演習	
5	比	比の考え方・比の計算の演習	
6	相似 直角三角形の辺の比	相似の考え方・直角三角形の辺の比	
7	三角比	三角比の考え方・有名角の三角比	
8	三角比	三角比の演習	
9	加速度 神経伝達速度	加速度の基本・公式 神経伝達速度の算出	
10	力と仕事	力と質量・運動の法則・仕事と仕事率	
11	ベクトル	ベクトルの基本・ベクトルの演算	
12	てこの計算	モーメント・てこ	
13	運動強度	代謝当量（METs）・BMI・消費エネルギー	
14	統計の基礎	統計の基本と指標	
15	総括	確認テスト	

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	前期	形態	講義	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	30	対象年次	1
科目名	社会科学基礎 □ 実務経験のある教員による授業				担当者	西浦 昭次		
使用教材	プリントを配布する							
科目概要	臨床実習において、実習指導者や患者と良好な関係を築くことを目的に、社会性の向上を目指した基礎、を解説する。							
到達目標	1 状況に合わせた挨拶ができる。 2 他者に不快感を与えない身だしなみを理解する。 3 敬語を理解し、状況に合わせて運用できる。 4 実習の礼状を正しく書くことができる。							
評価方法 基準	各学期末に筆記試験を行う。また、受講態度を点数化し、筆記試験の得点に加減する。総合的に60点以上の得点を獲得した者に単位を認定する。							
成績評価の フィードバック	試験の採点后、その結果を担任教員を通じて伝達する。 また、不合格者については個別に伝達する。							
事前準備	☑ なし □ あり							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	オリエンテーション ビジネスマナーとは	ビジネスマナーの必要性	
2	ビジネスマナーとは	社会で求められる能力	
3	キャリアシミュレーション	キャリアシミュレーション	
4	身だしなみと挨拶	身だしなみの基本 状況に合わせた挨拶	
5	敬語	敬語の基本	
6	敬語	状況に合わせた敬語の使い方	
7	礼状の書き方	ビジネス文書の基本	
8	礼状の書き方	実習礼状の書き方	
9	電話対応	電話対応の基本	
10	電話対応	実習先への電話のかけ方	
11	冠婚葬祭のマナー	慶事のマナー	
12	冠婚葬祭のマナー	弔事のマナー	
13	話し方	改まった話し方	
14	まとめ	講義のまとめ	
15	総括	確認テスト	

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	前期	形態	実技	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	30	対象年次	1
科目名	情報科学 ☒ 実務経験のある教員による授業				担当者	小金澤 清文		
使用教材	「30時間でマスター office2021」実教出版							
科目概要	理学療法士として必要な情報の収集や分析が出来るよう、また、医療施設において必要なコンピュータ操作が出来るように、パソコンの基礎から、ワープロソフトでの文書作成、表計算ソフトでの計算処理、プレゼンテーションソフトでのプレゼンテーションの作成方法を学ぶ。 理学療法士の実務経験を活かし、ワープロソフトや表計算ソフトなどについて手順や注意点等を解説し、その手順により理学療法士に必要な技能を習得する訓練を行う。							
到達目標	1. パソコンの基礎知識（OS、ブラウザ、操作方法）の習得 2. ワープロソフトで実務的文書（ビジネス文書、連絡・報告書など）の作成 3. 表計算ソフトで実用的（会計処理、統計計算、成績処理など）な表計算処理の実行 4. プレゼンテーションソフトで効果的なプレゼンテーション資料の作成							
評価方法 基準	ワープロソフト、表計算ソフト、プレゼンテーションソフトについて、与えられた課題をもとに作品を完成させ提出する。 出席状況や授業態度なども含めて総合的に判断し、60点以上得点した者に単位を認定する。							
成績評価の フィードバック	作品提出後、課題の解説をクラス全体に行う。細かい質問は個別対応する。							
事前準備	☒ なし ☐ あり							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	コンピュータ基礎	OS (Windows11) の基礎 ファイルとフォルダ・ブラウザの使い方	
2	Word基礎	Wordの画面構成 日本語入力システム・文字入力	
3	文章入力・書式	ビジネス文書の構成、文書の装飾	
4	表・画像・図形の挿入	表を活用した文書の作成 画像や図形を活用した文書の作成	
5	Excel基礎	Excelの画面構成 データ入力	
6	ワークシート編集・計算式	計算式の作り方 関数を使った表計算	
7	グラフ作成	様々なグラフの作成方法 グラフのカスタマイズ	
8	Word・Excelのまとめ	問題に沿って文書・ワークシートの作成・提出	
9	条件判定・検索関数	IF関数による条件判定・複合条件 VLOOKUP関数による検索	
10	便利な機能	データの並び替え、抽出 Wordとの連携	
11	PowerPoint基礎	PowerPointの画面構成 スライドの作成	
12	図形やグラフの活用	図形の描画、テキストの挿入 グラフの作成	
13	表や画像の活用	アニメーションの付け方 スライドショーの設定	
14	フォトレタッチ機能	明るさとコントラストの調整 画像の切り出し、合成	
15	Excel・PowerPointの まとめ	問題に沿ってワークシート・プレゼンテーション作成・提出	

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	前期	形態	講義	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	30	対象年次	1
科目名	医学英語 ☐ 実務経験のある教員による授業				担当者	井波 敬三		
使用教材	PT・OTが書いたリハビリテーション英会話（メジカルビュー社） 用語・語彙その他に関するプリント資料を適宜配布							
科目概要	リハビリテーション臨床現場での会話を想定した教材を用い、実戦的でシンプルな英会話表現を学ぶ。伝わる英語発音を身につけられるよう、反復トレーニングを行う。 専門領域で有用・重要な語彙の習得を目指す。単語の意味理解・記憶・自己学習の助けとなるよう、医学用語の接頭辞・接尾辞などを説明、例示する。 英語論文の基本的構成と頻出する用語を紹介し、論文読解の助けとする。 国内での理学療法士としての実務経験を活かし、国内での臨床業務や英語論文読解に必要な英語知識の習得を図る。 米国での理学療法従事経験を活かし、外国人患者との簡単なコミュニケーションを想定したトレーニングを行う。							
到達目標	伝わる英語発音で、会話のサンプル文を読み上げることができる。とくに有用なフレーズや表現は英文を見なくても暗唱できるようになる。 専門用語（日本語⇄英語）を理解し、重要なものについて正確に綴り、発音できる。頻出する接頭辞、接尾辞の意味を知り、日本語や一般的な英単語に置き換えることができる。 医学英語論文の基本的構成と、頻出する用語を理解する。							
評価方法 基準	会話表現、接頭・接尾辞と医学専門用語（以上は中間・期末試験とも出題）、英語論文（期末試験のみ出題）などに関する総合的筆記試験を行う。							
成績評価の フィードバック	中間試験、期末試験を実施し、合算で科目成績とする。 中間試験、期末試験の答案は返却しない。 中間試験、期末試験後、希望者に担任を通して成績を開示し、答案の閲覧を認める。 不合格者は学籍番号のみを掲示する。							
事前準備	☐ なし ☐ あり 教科書英文や、英単語を予習・復習するに越したことはないが、授業中に大きな声で会話練習に積極参加することが何よりも求められる。余裕があれば、教科書の会話音声はQRコードから簡単にスマホ再生できるので、聴いておく。							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	Lesson 1 初回の挨拶をしよう①	I'm a physical therapist. I'll be working with you today.	
2	Lesson 1 初回の挨拶をしよう②	How can I help you today? May I ask you a few questions?	
3	Lesson 2 痛む部位を聞いてみよう	Could you tell me where you have pain? It just hurts when I move.	
4	Lesson 5 基本的な肢位を指示してみよう	Are you able to lie down on your tummy? Could you move closer to me?	
5	Lesson 6 応用的な肢位を指示してみよう	Could you get down on your hands and knees, please? Sorry, I couldn't understand what you said.	
6	Lesson 7 バイタルサインを確認する	How are you feeling today? Do you mind if I check your heart rate?	
7	Lesson 8 自動可動域を測定してみよう	Please let me know if you have any pain. Is it pain or tightness?	
8	中間試験	第1回～第7回授業範囲	
9	Lesson 9 他動可動域を測定してみよう	Let me move your leg. It's 100 degrees.	
10	Lesson 10 体幹の可動域を測定してみよう	Would you please bend forward as far as possible? Would you rotate your body to the right?	
11	Lesson 12 筋力を測定してみよう	Cross your arms in front of your chest. We'll do the same thing on your other leg.	
12	Lesson 15 歩行評価をしてみよう	Could you show me how you walk? It's a bit scary.	
13	英語論文の構成と用語①	EBM, RCT, Original Article Title, Author, Abstract	
14	英語論文の構成と用語②	IMRAD Figure, Table, Reference	
15	まとめと復習	基本的会話表現と語彙の復習 期末試験オリエンテーション	

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	後期	形態	講義	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	30	対象年次	1
科目名	臨床コミュニケーション技術 ☐ 実務経験のある教員による授業				担当者	徳永 義隆		
使用教材	デール・カーネギー著 人を動かす							
科目概要	医療人として必要なコミュニケーション能力を養うと共に、臨床で対応する様々な事柄に対する対処法を学ぶ。 総合病院や老人施設での実務経験を活かし、様々な臨床で接する患者や家族に対し、適切な対応を取り、リハビリテーションを実践出来るように講義を行う。							
到達目標	1 傾聴と共感というコミュニケーションの基本を身につける。 2 状況や相手の状況に応じて適切なコミュニケーションを行える。 3 仕事の遂行に必要な情報を得ることができる。 4 自分の考えを的確に相手に伝えることができる。							
評価方法 基準	各授業ごとの提出課題と期末に行う小論文のテストを総合して判定する。							
成績評価の フィードバック	各授業ごとの提出課題を返却し、解説を行いより理解を深める。							
事前準備	☐ なし ☒ あり デール・カーネギー著「人を動かす」を事前に読んでおくこと。							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	なぜコミュニケーションを学ぶのか	医療職としてコミュニケーション能力の必要性について学ぶ	
2	社会で働くために必要な力とは	社会人としての基礎的な力について学ぶ	
3	伝える・伝わるコミュニケーションとは	人に伝えるために必要なコミュニケーションスキルについて学ぶ	
4	コミュニケーションのタイプ	世代間によるコミュニケーションの取り方の違いについて学ぶ	
5	コミュニケーションのタイプにおける解決と解消	解決型と解消型のコミュニケーションの違いについて学ぶ	
6	学校におけるコミュニケーション	学生時代に身に付けたいコミュニケーションの基本について学ぶ	
7	実習で求められるコミュニケーション	目上の人や患者に対するコミュニケーションの取り方学ぶ	
8	入職までに身に付けたいコミュニケーション	就職活動に対応する為に必要なコミュニケーション能力について学ぶ	
9	人を育てるコミュニケーション	新人教育における必要なコミュニケーション能力を学ぶ	
10	職場でのコミュニケーション	城し先輩、同僚との仕事を進めていく上での円滑なコミュニケーション法を学ぶ	
11	臨床現場でのコミュニケーション	臨床現場でのプロセスレコードについて学ぶ	
12	医療安全のためのコミュニケーション	医療場面における状況の伝え方、支持の受け方について学ぶ	
13	クレーム対応のコミュニケーション	ケーススタディをもとにクレームに対する基本的な対応を学ぶ	
14	ミーティングのためのコミュニケーション	カンファレンスの際必要な結論を先に話す話し方や相手の意見を尊重する話し方を学ぶ	
15	メンタルヘルスとコミュニケーション	人間関係を意識したコミュニケーションの取り方やその相手や自分に与える影響を学ぶ	

履修区分	必修	単位数	6	開講時期	通年	形態	講義	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	120	対象年次	1
科目名	解剖学Ⅰ				担当者	佐藤 友彦		
	☐ 実務経験のある教員による授業							
使用教材	PT・OTビジュアルテキスト解剖学第1版(羊土社) プロメテウス解剖学コアアトラス第3版(医学書院) 、レジュメ(教員作成)							
科目概要	理学療法士及び基礎医学系大学院での研究経験を活かし、医学的知識の基本となる解剖学を10種類の器官系に分け、各器官系ごとに1年間をかけ学ぶ。 初学者にもわかりやすく学んでもらう為にテキストと解剖学アトラス、レジュメを使用し多くの図表を示しながら講義を進める。							
到達目標	1. 10系統の器官系の詳細な構造と概論的な機能について理解する。 2. 運動器・神経系・循環器について詳細な構造を理解する。 3. 国家試験に対応できる知識を身につける。 4. 臨床場面に必要な解剖学的知識を身につける。							
評価方法 基準	前期(中間試験・期末試験)、後期(中間試験・期末試験)を実施する。 選択・記述形式の問題を出題し60点未満を不合格とする。							
成績評価の フィードバック	各講義の終盤に国家試験の過去問を解かせ、学んだ内容がどのように国家試験で問われるか確認させる。また、授業の冒頭で小テストを行い、前回の講義で学んだ知識が定着しているかを確認する。							
事前準備	☐ なし □ あり							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	解剖学総論 人体の区分と解剖学用語	体幹・体肢・体腔の詳細な区分、 水平面・前額面・矢状面の区別	
2	上肢帯の解剖 骨格・靱帯・関節・筋	肩甲骨と鎖骨で構成される 上肢帯の骨格を詳細に学ぶ	
3	上肢帯の解剖 骨格・靱帯・関節・筋	上肢帯の連結(靱帯) "三角筋、棘上筋など 上肢帯に付く筋の構造と作用"	
4	自由上肢(上腕骨)の解剖 骨格・靱帯・関節・筋	上腕骨の詳細な構造	
5	自由上肢(前腕)の解剖 骨格・靱帯・関節・筋	橈骨・尺骨の詳細な構造	
6	自由上肢(手部)の解剖 骨格・靱帯・関節・筋	手部の詳細な骨格	
7	自由上肢(肩関節)の解剖 骨格・靱帯・関節・筋	上肢帯と上腕骨の連結(靱帯)	
8	自由上肢(手部)の解剖 骨格・靱帯・関節・筋	前腕の骨と手部の骨の連結(靱帯)	
9	上腕の筋	上腕二頭筋、上腕三頭筋など 上腕にある筋の構造と作用	
10	前腕の筋	円回内筋、浅指屈筋など 前腕にある筋の構造と作用	
11	手の筋	母指球筋、小指球筋の構造と作用	
12	下肢の骨格(1)	寛骨と仙骨で構成される骨盤の構造と機能	
13	下肢の骨格(2)	大腿骨の詳細な構造	
14	下肢の骨格(3)	脛骨・腓骨の詳細な構造 足根骨、足趾の骨の詳細な構造	
15	下肢帯の連結 靱帯・関節	寛骨と仙骨の連結(靱帯)	

回	単元	内容	備考
16	股関節の連結 関節	骨盤と大腿骨の連結(靱帯)	
17	膝関節の連結 関節と靱帯	大腿骨と脛骨・腓骨の連結(靱帯)	
18	足の連結 関節と靱帯	脛骨・腓骨と足根骨の連結(靱帯)	
19	下肢帯の筋	腸腰筋、大殿筋など 下肢帯から大腿に付く筋の構造と作用	
20	大腿の筋	縫工筋、大腿四頭筋など 大腿にある筋の構造と作用	
21	下腿の筋・足の筋	前脛骨筋、腓腹筋など 下腿にある筋の構造と作用 足部の筋	
22	骨格系：脊柱と椎骨	頸椎、胸椎、腰椎・仙椎の詳細な構造	
23	胸郭の骨格	胸郭を構成する胸椎・肋骨・胸骨の詳細な構造	
24	胸部の筋と呼吸筋	大胸筋、小胸筋など 胸郭にある筋の構造と作用	
25	背部・腹部の筋	僧帽筋、腹直筋など 背部、腹部にある筋の構造と作用	
26	頸部の筋	胸鎖乳突筋や斜角筋など 頸部にある筋の構造と作用	
27	頭部の筋	表情筋、外眼筋など 頭部にある筋の構造と作用	
28	人体の構成／細胞	受精卵から個体発生までの分化、 細胞内小器官の構造と機能	
29	人の構成／組織	上皮組織、支持組織など 人体を構成する組織の構造と機能	
30	骨学総論（１）	骨の組織学的構造と形状による分類	

回	単元	内容	備考
31	骨学総論（2）	骨の分化と成長、骨のリモデリング	
32	関節と靭帯：総論	頭蓋骨・椎骨の連結、関節包の構造	
33	筋系総論： 骨格筋の構造と作用	筋の起始・停止、関節の運動方向	
34	骨格系：頭蓋骨（1）	頭蓋骨の詳細な構造	
35	骨格系：頭蓋骨（2）	内・外頭蓋底の詳細な構造	
36	頭蓋の連結/ 脊柱と頭蓋の連結	頭蓋骨と下顎骨の連結(靭帯)、 頭蓋骨と脊椎の連結(靭帯)	
37	神経系：神経系の構造	神経細胞の構造と機能、脳室	
38	神経系：中枢神経系（1）	脊髄から延髄の詳細な構造	
39	神経系：中枢神経系（2）	橋・中脳・間脳の詳細な構造	
40	神経系：中枢神経系（3）	大脳の詳細な構造と機能局在	
41	神経系：中枢神経系（4）	小脳の詳細な構造と機能	
42	神経系：末梢神経系（1）	脳神経の構成、構造、機能	
43	神経系： 上行性伝導路・下行性伝導路	感覚性伝導路と運動性伝導路の走行と機能	
44	神経系：末梢神経系（2）	皮膚分節と頸神経の構造と機能	
45	神経系：末梢神経系（3）	腕神経叢の構造と機能	

回	単元	内容	備考
46	神経系：末梢神経系（４）	胸神経の構造	
47	神経系：末梢神経系（５）	腰神経と仙骨神経の構造	
48	循環器系：心臓の構造	心臓の構造と心臓の栄養血管	
49	循環器系：動脈の構造（１）	大動脈から分岐する主な血管	
50	循環器系：動脈の構造（２）	鎖骨下動脈から分岐する主な血管	
51	循環器系：静脈系の構造	上大静脈、下大静脈、門脈系の構造	
52	循環器系：リンパ系	全身のリンパ系の概略およびリンパ管の構造	
53	呼吸器系の構造と機能(1)	気道の構造と機能、ガス交換の仕組み	
54	呼吸器系の構造と機能(2)	肺の構造と機能、呼吸生理概論	
55	消化器系の構造と機能(1)	口腔から直腸までの構造	
56	消化器系の構造と機能(2)	消化器系の生理概論	
57	内分泌系の構造と機能(1)	内分泌器官の構造	
58	内分泌系の構造と機能(2)	内分泌器官の生理とホルモンの作用	
59	泌尿器系の構造と機能	腎臓の構造と泌尿器系の生理概論	
60	感覚器系の構造と機能	感覚器の構造と生理	

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	後期	形態	講義	
開講学科	理学療法学科 夜間課程				配当時間	30	対象年次	3
科目名	解剖学Ⅱ ☐ 実務経験のある教員による授業				担当者	新井 清代		
使用教材	PT・OTビジュアルテキスト解剖学第1版(羊土社)、クエスチョンバンクPT・OT専門基礎、プロメテウス解剖学コアアトラス第3版(医学書院) 、 レジュメ(教員作成)							
科目概要	理学療法士の実務経験を活かし、1年次に修得した解剖学の知識を評価実習、臨床実習、国家試験に必要な分野にしばって総復習する。							
到達目標	1. 10系統の器官系の国家試験に頻出の解剖学的知識を復習する。 2. 評価・臨床実習に必要な解剖学的知識を身につける。							
評価方法 基準	中間試験50点、期末試験50点の合算とする。							
成績評価の フィードバック	各講義の終盤に国家試験の過去問を解かせる。 教員による国家試験の解法を伝える。							
事前準備	☐ なし ☒ あり 各回の講義の内容を復習することが望ましい。							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	神経系の構造(1)	大脳の機能局在、脳幹・脊髄の構造 etc.	
2	神経系の構造(2)	末梢神経の構造、伝道路、脳神経 etc.	
3	循環器の構造(1)	脳血管の走行	
4	循環器の構造(2) 循環器の構造(3)	心臓の構造、冠状動脈の走行、刺激伝導系 全身の動・静脈の走行、門脈	
5	消化器系の構造(1)	食道の構造と機能	
6	消化器系の構造(2)	肝臓・胆嚢・膵臓の構造と機能	
7	呼吸器系の構造(1)	肺胞と肺野	
8	呼吸器系の構造(2)	気道の構造	
9	泌尿器系の構造(1)	腎臓の構造	
10	泌尿器系の構造(2)	膀胱、尿路	
11	骨格系の構造(1)	頭蓋骨の構造	
12	骨格系の構造(2)	四肢、体幹の骨の構造	
13	筋系の構造(1)	頭頸部、体幹の筋	
14	筋系の構造(2)	上肢の筋/下肢の筋	
15	総括	確認テスト	

回	単元	内容	備考
16	演習(1)	解剖学模擬試験	
17	演習(2)	解剖学模擬試験	
18	演習(3)	解剖学模擬試験	
19	演習(4)	解剖学模擬試験	
20	演習(5)	解剖学模擬試験	
21	演習(6)	解剖学模擬試験	
22	演習(7)	解剖学模擬試験	
23	総括	確認テスト	
24			
25			
26			
27			
28			
29			
30			

履修区分	必修	単位数	8	開講時期	通年	形態	講義	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	120	対象年次	2
科目名	生理学Ⅰ ☒ 実務経験のある教員による授業				担当者	佐藤 友彦		
使用教材	「生体のしくみ標準テキスト（第3版）」医学映像教育センター							
科目概要	大学院での研究経験を活かし、医学的知識の基本となる生理学を器官系ごとに1年間をかけ人体の機能について解説する。							
到達目標	1 年次に習得した人体の構造の知識を基礎として、人体の機能を植物性機能から動物性機能に至るまで理解することを目標とする。							
評価方法 基準	前期(中間試験・期末試験)、後期(中間・期末試験、レポートの結果、出席状況、授業態度等を総合的に判断し60点未満を不合格とする。							
成績評価の フィードバック	1. 中間試験、期末試験を実施し結果を公表する。 2. 不合格者には再試験を行う。							
事前準備	☒ なし ☐ あり							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	生理学の基礎 1	生理学とは	
2	生理学の基礎 2	受動輸送と能動輸送	
3	神経の基本構造 1	神経細胞と興奮の伝導	
4	神経の基本構造 2	膜電位	
5	神経の基本構造 3	興奮発生とイオンチャネル	
6	神経の基本構造 4	興奮伝導	
7	骨格筋の機能 1	骨格筋の構造	
8	骨格筋の機能 2	運動機能の調節	
9	骨格筋の機能 3	中枢神経系の高次機能	
10	骨格筋の機能 4	感覚一般と体性感覚	
11	シナプス伝達 1	神経筋伝達	
12	シナプス伝達 2	中枢神経系のシナプス伝達	
13	シナプス伝達 3	神経伝達物質	
14	自律神経系 1	自律神経系の構造と作用	
15	自律神経系 2	自律神経系の受容体	

回	単元	内容	備考
16	運動系 1	脊髄	
17	運動系 2	脳幹と小脳	
18	運動系 3	大脳皮質と大脳基底核	
19	感覚 1	体性感覚と上行性伝道路	
20	感覚 2	味覚と嗅覚	
21	感覚 3	聴覚と前庭感覚	
22	感覚 4	視覚	
23	脳の統合機能 1	大脳皮質の構造と機能	
24	脳の統合機能 2	大脳辺縁系と視床下部	
25	脳の統合機能 3	睡眠と脳波	
26	脳の統合機能 4	学習と記憶	
27	血液 1	血液の成分	
28	血液 2	血液凝固	
29	血液 3	血液型	
30	血液 4	免疫	

回	単元	内容	備考
31	心臓 1	心臓の構造と興奮	
32	心臓 2	心電図と心周期	
33	循環 1	血行力学（1）	
34	循環 2	血行力学（2）	
35	循環 3	循環調節	
36	循環 4	微小循環	
37	循環 5	特殊領域の循環	
38	呼吸 1	肺の構造	
39	呼吸 2	気道の機能	
40	呼吸 3	呼吸運動	
41	呼吸 4	呼吸力学とガス交換	
42	呼吸 5	呼吸運動の調節	
43	消化と吸収 1	消化管の構造と神経支配	
44	消化と吸収 2	消化管の運動	
45	消化と吸収 3	消化液の分泌	

回	単元	内容	備考
46	消化と吸収 4	栄養素の分解と吸収	
47	内分泌 1	ホルモンの作用機序	
48	内分泌 2	視床下部と下垂体	
49	内分泌 3	副腎髄質と副腎皮質	
50	内分泌 4	甲状腺と上皮小体	
51	内分泌 5	膵臓の内分泌機能	
52	生殖 1	生殖生理	
53	生殖 2	性ホルモン	
54	腎機能 1	腎臓の構造	
55	腎機能 2	クリアランス	
56	腎機能 3	再吸収と分泌	
57	腎機能 4	排尿	
58	酸塩基平衡	酸塩基平衡と異常	
59	代謝と体温 1	栄養と代謝	
60	代謝と体温 2	体温とその調節機構	

履修区分	必修	単位数	3	開講時期	通年	形態	講義・演習	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	45	対象年次	3
科目名	生理学Ⅱ				担当者	佐藤 友彦		
	☒ 実務経験のある教員による授業							
使用教材	新生理学Qシリーズ(日本医事新報社)、クエスチョンバンクPT・OT専門基礎レジュメ(教員作成)							
科目概要	基礎医学系大学院での研究経験を活かし、生理学の知識を初歩から国家試験合格に必要なレベルまで講義する。 また、2年次に修得した生理学の知識を評価実習、臨床実習、国家試験に必要な分野にしばって総復習する。							
到達目標	1. 10系統の器官系の国家試験に頻出の生理学的知識を復習する。 2. 評価・臨床実習に必要な解剖学的知識を身につける。							
評価方法 基準	前期(中間試験・期末試験)、後期(中間試験・期末試験)を実施する。 選択・記述形式の問題を出題し60点未満を不合格とする。							
成績評価の フィードバック	各講義の終盤に国家試験の過去問を解かせる。 教員による国家試験の解法を伝える。							
事前準備	☒ なし ☐ あり							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	代謝	体温調節、基礎代謝	
2	血液	血液の組成、血球の働き	
3	免疫	リンパ系の機能、アレルギー	
4	循環(1)	心臓の機能、ペースメーカー、刺激伝導系	
5	循環(2)	心拍数、心拍出量、血圧	
6	循環(3)	運動時の生体反応	
7	呼吸(1)	酸・塩基平衡	
8	呼吸(2)	運動時の呼吸、酸素解離曲線	
9	呼吸(3)	呼吸中枢、呼吸筋の構造と機能	
10	消化と吸収(1)	摂食・嚥下機能	
11	消化と吸収(2)	消化酵素	
12	消化と吸収(3)	肝・胆・膵の構造と機能	
13	排泄(1)	排尿のメカニズム	
14	排泄(2)	排便のメカニズム	
15	内分泌(1)	内分泌総論(フィードバック機構)	

回	単元	内容	備考
16	内分泌(2)	ホルモンの種類と機能	
17	生殖(1)	男性の生殖生理	
18	生殖(2)	女性の生殖生理	
19	筋生理(1)	平滑筋・骨格筋の区分と収縮機構	
20	筋生理(2)	運動単位、筋紡錘・ゴルジ腱器官の機能	
21	神経生理(1)	神経線維分類、活動電位の伝導	
22	神経生理(2)	中枢神経の機能、自律神経の機能	
23	感覚と受容器	刺激と受容器	
24			
25			
26			
27			
28			
29			
30			

履修区分	必修	単位数	4	開講時期		形態	講義	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	90	対象年次	1
科目名	運動学Ⅰ □ 実務経験のある教員による授業				担当者	横山 大輝 藤崎 和希		
使用教材	PT・OTビジュアルテキスト専門基礎運動学、 運動療法のための機能解剖学的触診技術、配布資料							
科目概要	身体運動の科学と定義される運動学は、医学、物理学、心理学、社会学など多くの学問を統合したものである。例えば、人間の運動は重力といった地球で暮らす上では常に受ける外力を踏まえてのことで、加えて、心理が運動に及ぼす影響も多大なものである。よって、運動とひとことで言っても様々な分野が関わりがあることから、幅広い分野の学習が必要となる。 理学療法士の実務経験を活かし、身体 of 運動に関わる仕組みや働きについて解説し、理学療法における必要な知識を講義する。							
到達目標	1、人体の運動に関わる筋・骨格系、神経系の名称と働きについて理解する 2、各関節運動学について理解する 3、運動学的分析、運動力学的分析について理解する 4、姿勢・動作における基本的知識を理解し、「臨床運動学」の講義に向けた基礎知識を習得する							
評価方法 基準	単元ごとの小テスト並びに、中間・期末テストの点数から総合的に評価する。							
成績評価の フィードバック	各単元ごとの小テストの返却及び解説の実施。 本試験採点后、点数と内容を個別説明する。不合格者に関しては、学籍番号のみを掲示。							
事前準備	☒ なし ☐ あり 前回講義までの内容を復習しておく。 同時期に学習している解剖学について、理解を深めておく。							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	イントロダクション	運動を表す用語、簡単な関節構成について学習する	
2	下肢①	骨盤の構造・運動について学習する	
3	下肢②	股関節解剖、筋の働きを学習する	
4	下肢③	内転筋群の運動学について学習する	
5	下肢④	大腿前面筋、膝蓋骨の働きについて学習する	
6	下肢⑤	大腿後面筋について学習する	
7	下肢⑥	膝関節の運動学について学習する	
8	下肢⑦	下腿の筋について学習する	
9	下肢⑧	足関節解剖、運動学について学習する	
10	下肢⑨	足の変形について学習する	
11	体幹①	脊柱の解剖について学習する	
12	体幹②	各脊椎の特徴、運動学について学習する	
13	体幹③	体幹前面の筋について学習する	
14	体幹④	体幹後面の筋について学習する	
15	前期総復習	前期学習内容の確認	

回	単元	内容	備考
16	体幹⑤	先行性随伴性収縮、呼吸筋について学習する	
17	上肢①	肩関節解剖について学習する	
18	上肢②	肩甲骨の動き、連動性について学習する	
19	上肢③	ローテーターカフ、フォースカップルなどの肩関節運動学について学習する	
20	上肢④	肘関節解剖、運動学について学習する	
21	上肢⑤	上腕前腕の筋について学習する	
22	上肢⑥	手関節の運動、手内在筋について学習する	
23	顔面	顔面筋の作用について学習する	
24	生体力学①	身体とてこについて学習する	
25	生体力学②	重力とモーメントについて学習する	
26	運動学習①	理学療法に必要な運動学習について学習する	
27	運動学習②	理学療法に必要な運動学習について学習する	
28	国家試験過去問①	国家試験の過去問に触れ知識を統合する	
29	国家試験過去問②	国家試験の過去問に触れ知識を統合する	
30	後期総復習	後期学習内容の確認	

回	単元	内容	備考
31	姿勢①	体位と構え、動的姿勢と静的姿勢について学習する	
32	姿勢②	安定性と可動性について学習する	
33	姿勢③	人の姿勢について学習する	
34	姿勢④	立位姿勢評価について学習する	
35	姿勢⑤	立位姿勢評価まとめ、異常姿勢評価発表準備	
36	姿勢⑥	異常姿勢について発表	
37	歩行①	正常歩行、歩行周期	
38	歩行②	歩行周期の区分	
39	歩行③	歩行周期中の関節運動	
40	歩行④	歩行周期中の筋活動	
41	歩行⑤	高齢者の歩行、走行との違い	
42	グループワーク①	異常歩行についてグループワーク	
43	グループワーク②	異常歩行についてグループワーク	
44	発表	異常歩行について各グループ発表	
45	筆記試験		

履修区分	必修	単位数	3	開講時期	通年	形態	講義	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	45	対象年次	4
科目名	運動学Ⅱ ☐ 実務経験のある教員による授業				担当者	横山雅人		
使用教材	PT/OT 必修ポイント専門基礎分野 基礎医学，他関連する文献，配布資料							
科目概要	本講義では，1,2年生で学習した運動学，臨床運動学の知識をもとに，国家試験(運動学)に関わる内容を学習する．加えて，基礎医学の知識を踏まえ，臨床場面への応用方法などの3年次実習につながる知識の応用，学術論文の見方などを学習する． 理学療法士の実務経験を活かし，国家試験の出題項目や頻出事項について基本的知識を習得し，さらに練習問題や過去問題の演習及び解説により知識の統合を図る．							
到達目標	1、国家試験(運動学)の内容を臨床場面の視点から理解する 2、学術論文の検索方法を身につける 3、学術論文の内容を理解できる 4、理解した内容をわかりやすく他の学生に発表できる							
評価方法 基準	前期：期末試験7割，グループ課題3割(ピア評価1割，グループ発表評価2割) 後期：期末試験 7 割，レポート 3 割							
成績評価の フィードバック	本試験採点后、点数と内容を個別説明する。不合格者に関しては、学籍番号のみを掲示。							
事前準備	☐ なし ☒ あり これまで学んできた解剖学、生理学、運動学を中心に理解を深めておく。							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	イントロダクション	本講義前期の概要，論文検索方法を学習する	
2	論文抄読	論文の検索方法，研究方法（観察研究，介入研究など）の種類を学習する	
3	国試①	下肢の筋，顔面における機能と運動を学習する	
4	国試②	股関節における機能と運動特性を学習する	
5	国試③	膝関節における機能と運動特性を学習する	
6	国試④	足関節における機能と運動特性を学習する	
7	国試⑤	肩関節の構造・機能を理解する	
8	まとめ	授業のまとめ	
9	国試⑥	肘関節、手関節の構造・機能を理解する	
10	国試⑦	体幹の構造・機能を理解する	
11	国試⑧	筋の作用などを初学者に教えることで理解の深化をはかる	
12	論文抄読	グループ発表に向けて資料作成，発表の準備を行う	
13	論文抄読	グループ発表(批判的思考能力の向上をはかる)	
14	論文抄読	グループ発表(批判的思考能力の向上をはかる)	
15	前期まとめ	前期内容確認	

回	単元	内容	備考
16	イントロダクション	本講義後期の概要説明，理学療法評価に関する論文収集の重要性を学習する	
17	国試①	力学の基礎を学習し、仕事量の計算やてこについて学習する	
18	国試②	歩行におけるモーメントと各相の特徴を学習する	
19	論文抄読	進捗状況を発表・報告を受け，各学習者の学習の補助とする	
20	国試③	運動学習における結果の知識とパフォーマンスについて学習する	
21	論文抄読	発表(批判的思考能力の向上をはかる)	
22	国試④	筋の作用などを初学者に教えることで理解の深化をはかる	
23	後期まとめ	後期内容確認	
24			
25			
26			
27			
28			
29			
30			

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	後期	形態	講義	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	30	対象年次	1年次
科目名	人間発達学				担当者	宮澤 満		
	☒ 実務経験のある教員による授業							
使用教材	教員作成の資料・プリント 「イラストでわかる人間発達学 第1版」医歯薬出版							
科目概要	理学療法士の実務経験を活かし、心理面・運動面を中心に発達を学び、各年齢（月齢）における発達の特徴を心理学、解剖学、生理学、運動学等の基礎科目の知識を用いて講義する。また脳性麻痺児の姿勢・動作なども対比させ授業を進める。							
到達目標	1. 発達学を学ぶ目的・意義・原則・関与する因子が説明できる。 2. 発達理論、心理的発達段階の特徴について理解し説明することが出来る。 3. 身体発育について、その特徴を理解し説明することが出来る。 4. 運動面の発達段階を、個々の特徴について理解し説明することが出来る。 5. 各発達段階における脳性麻痺児の特徴を理解し説明することが出来る。							
評価方法 基準	後期末に筆記試験を行う。60点以上得点した者に単位を認定する。評価基準については、学科の規定による。							
成績評価の フィードバック	試験の採点後、答案は返却しない。また、担任を通して成績を公表する。 不合格者については学籍番号のみを掲示する。							
事前準備	☐ なし ☒ あり 解剖学、生理学（基礎）、運動学等の専門基礎科目を再復習しておくことを望む。							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	発達概念	発達に関する定義 スキヤモンの臓器別発育曲線	
2	発達理論	漸成的発達論 非漸成的発達論	
3	発達検査 ①	DENVER II 一発達判定法 その他の検査法	
4	発達検査 ②	遠城寺式乳幼児分析的発達検査法 障害児のための評価	
5	姿勢反射・反応	原始反射、姿勢反射・反応 (中枢レベル、出現・消失[統合]時期など)	
6	運動発達 ①	0～3カ月の運動発達	
7	運動発達 ②	4～6カ月の運動発達	
8	運動発達 ③	7～9カ月の運動発達	
9	運動発達 ④	10～12カ月の運動発達	
10	運動発達 ⑤	13～18カ月の運動発達	
11	運動発達 ⑥	6歳までの運動発達	
12	上肢機能の発達	握りとつまみ動作の発達	
13	ADLの発達	遊び・食事・排泄・更衣の発達	
14	学童・青年・成人・老年期の発達	各期の身体的変化 知能・記憶と加齢変化	
15	まとめ	科目全体の確認	

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	後期	形態	講義	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	30	対象年次	1
科目名	病理学				担当者	佐藤 友彦		
	実務経験のある教員による授業							
使用教材	なるほどなっとく病理学 改訂2版(南山堂)、レジュメ							
科目概要	基礎医学系大学院での研究経験を活かし、各種疾患の病態を理解するにあたり、各種疾患で出現する主要症候の成り立ちを講義する。 内科疾患だけでなく、理学療法士が臨床で目にする多くの疾患に共通する症候を理解しリハビリ実施に役立つ知識を修得する。							
到達目標	1. 主要症候の発生機序を理解する。 2. 主要症候を理解しリハビリ実施時のリスク管理に役立てる。 3. 国家試験合格のための知識を修得する。							
評価方法 基準	後期末に筆記試験を行い、60点以上得点した者に単位を認定する。							
成績評価の フィードバック	各症候の講義が終了した後国家試験の過去問を解き,疾患の理解度を確認する。							
事前準備	☒ なし ☐ あり							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	病理学総論	病理学を学ぶ意義	
2	病理学各論 1	炎症	
3	病理学各論 2	肥満・るいそう	
4	病理学各論 3	発熱	
5	病理学各論 4	ショック	
6	病理学各論 5	痙攣	
7	病理学各論 6	チアノーゼ、黄疸	
8	病理学各論 7	意識障害、失神	
9	病理学各論 8	発疹	
10	病理学各論 9	脱水、浮腫	
11	病理学各論 10	出血傾向	
12	病理学各論 11	高血圧	
13	病理学各論 12	胸水	
14	病理学各論 13	呼吸困難	
15	病理学各論 14	頭痛、めまい	

履修区分	必修	単位数	4	開講時期	通年	形態	講義	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	60	対象年次	2
科目名	神経内科学 ☐ 実務経験のある教員による授業				担当者	非常勤講師		
使用教材	病気が見える 脳・神経							
科目概要	理学療法国家試験および実習では中枢神経疾患に対する深い知識が求められる。本講義では、脳血管疾患や変性疾患など神経に起因する疾患を広く学ぶことを目的とする。 理学療法士として病院、施設での実務経験を活かし、臨床現場に必要な中枢神経疾患について解説する。							
到達目標	1、中枢神経系の解剖・生理の理解 2、神経系の検査法の取得 3、神経系病変の理解 4、神経系病変に対する治療法							
評価方法 基準	前期及び後期末に筆記試験を行う。また、受講態度を点数化し、筆記試験の得点に加減する。総合的に60点以上得点した者に単位を認定する。 評価基準については、学科の規定による。							
成績評価の フィードバック	試験の採点后、答案は返却しない。また、担任を通じて成績優秀者を公表する。不合格者については、学籍番号のみを掲示する。							
事前準備	☐ なし ☒ あり							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	脳の解剖・生理 1	髄膜や脳室について学ぶ。	
2	脳の解剖・生理 2	中枢神経の発生と解剖を学ぶ。	
3	脳の解剖・生理 3	中枢神経系の血管を学ぶ。	
4	神経疾患の診察法 1	問診や全体的な観察から疾患の診断法を学ぶ。	
5	神経疾患の診察法 2	反射や感覚検査について学ぶ。	
6	神経疾患の診察法 3	脳神経の見方、その他の検査について学ぶ。	
7	血液凝固のメカニズム	一次止血二次止血について学ぶ。	
8	中枢疾患の画像診断 1	頭部CT画像について学ぶ。	
9	中枢疾患の画像診断 2	頭部MRI画像について学ぶ。	
10	脳血管疾患 1	脳血管疾患の分類について学ぶ。	
11	脳血管疾患 2	脳内出血について学ぶ。	
12	脳血管疾患 3	くも膜下出血について学ぶ	
13	脳血管疾患 4	脳ヘルニアについて学ぶ。	
14	脳血管疾患 5	脳虚血性疾患について学ぶ。	
15	中枢神経系の外傷	硬膜外出血や硬膜下出血、びまん性軸索損傷などについて学ぶ。	

回	単元	内容	備考
16	神経系の変性疾患 1	アルツハイマー病について学ぶ。	
17	神経系の変性疾患 2	パーキンソン病の病理について学ぶ。	
18	神経系の変性疾患 3	パーキンソン病の病態について学ぶ。	
19	神経系の変性疾患 4	パーキンソン病の治療について学ぶ。	
20	中枢神経系の脱髄疾患	多発性硬化症について学ぶ。	
21	神経筋接合部の疾患	重症筋無力症やランバートイートン症について学ぶ。	
22	筋肉の疾患 1	デュシェンヌ型ベッカー型筋ジストロフィーについて学ぶ。	
23	筋肉の疾患 2	福山型、筋強直型ジストロフィーについて学ぶ。	
24	筋肉の疾患 3	その他の筋ジストロフィーについて学ぶ。	
25	筋肉の疾患 4	多発性筋炎、皮膚筋炎について学ぶ。	
26	筋肉の疾患 5	その他のミオパチーについて学ぶ。	
27	末梢神経の疾患	シャルコーマリートゥース病などのニューロパチーについて学ぶ。	
28	発作性神経疾患	各種のてんかん発作について学ぶ。	
29	脳腫瘍	膠芽種などの脳腫瘍について学ぶ。	
30	神経系の感染症	細菌、真菌やウイルス性感染症について学ぶ。	

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	通年	形態	講義	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	60	対象年次	2
科目名	整形外科学 ■ 実務経験のある教員による授業				担当者	藤崎 和希		
使用教材	病気が見える Vol.11 運動器・整形外科							
科目概要	本講義は、身近な疾患である肩こりや腰痛をはじめとして、多種多様に存在する整形外科的疾患についての病態や症状の特徴、治療としての服薬や手術などについての知識を深め、理学療法を実施する時の礎となる基礎疾患知識を固める。 整形外科病院勤務の実務経験を活かし、多様な運動器と理学療法の関わりについて解説する。							
到達目標	1、国家試験(整形外科学)の内容を臨床場面の視点から理解する 2、理解した内容をわかりやすく他の学生に発表できる							
評価方法 基準	期末試験5割，小テスト2割，グループ課題2割，提出物1割(出席)							
成績評価の フィードバック	本試験採点后、点数と内容を個別説明する。 不合格者に関しては、学籍番号のみを掲示。							
事前準備	☐ なし ☒ あり これまで学んできた解剖学、生理学、運動学を中心に理解を深めておく。							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	イントロダクション	本講義の概要, 整形外科疾患の分類を学習する	
2	骨の生理	骨の構造,生理及び骨代謝について学習する	
3	骨粗鬆症	骨粗鬆症及び関連した骨折について学習する	
4	骨折 (上肢)	上肢骨折の病態と分類・手術療法について学習する	
5	骨折 (下肢)	下肢骨折の病態と分類・手術療法について学習する	
6	骨端症	骨端症の病態と原因について理解する	
7	まとめ	実施した授業のまとめ	
8	関節の生理	関節の構造,生理及び骨代謝について学習する	
9	肩関節脱臼	肩関節脱臼の病態と固定方法,手術療法について学習する	
10	変形性股関節症	変形性股関節症の病態と手術療法,保存療法について学習する	
11	変形性膝関節症	変形性膝関節症の病態と手術療法,保存療法について学習する	
12	関節リウマチ①	症例を提示し,関節リウマチの病態と各関節の変形について学習する	
13	関節リウマチ②	症例を提示し,関節リウマチの病態と日常生活動作との関連について学習する	
14	半月板損傷	半月板損傷の病態と手術療法,保存療法について理解する。	
15	まとめ	後期授業内容の確認	

回	単元	内容	備考
16	イントロダクション 筋の生理	本講義の概要, 筋の生理について学習する	
17	筋損傷	肉離れ, 筋挫傷の病態と合併症, 保存療法について学習する	
18	腱及び靭帯の生理 肩関節腱板断裂	腱の生理, 肩関節腱板断裂の病態と手術療法, 保存療法について学習する	
19	外側上顆炎	外側上顆炎の病態と診断, 保存療法について学習する	
20	アキレス腱断裂	アキレス腱断裂の病態と診断, 手術療法, 保存療法について学習する	
21	膝靭帯損傷	膝靭帯損傷の病態と診断, 手術療法, 保存療法について学習する	
22	足靭帯損傷	足靭帯損傷の病態と診断, 手術療法, 保存療法について学習する	
23	まとめ	実施した授業のまとめ	
24	脊髄損傷①	脊髄損傷の病態と高位診断, 横位診断について学習する	
25	脊髄損傷②	脊髄損傷の分類と損傷高位における日常生活動作の違いを学習する	
26	椎間板ヘルニア 脊柱管狭窄症	椎間板ヘルニアと脊柱管狭窄症の病態と診断について学習する	
27	小テスト	脊髄損傷、椎間板ヘルニアの小テストを実施する	
28	末梢神経傷害①	末梢神経障害の病態と腕神経叢損傷について学習する	
29	末梢神経傷害②	橈骨神経麻痺、正中神経麻痺、尺骨神経麻痺について学習する	
30	まとめ	前期授業内容の確認	

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	前期	形態	講義	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	30	対象年次	2
科目名	精神医学 ☐ 実務経験のある教員による授業				担当者	徳永 義隆		
使用教材	PT・OTビジュアルテキスト精神医学 授業プリント							
科目概要	精神医学の特徴を身体医学との比較で学び、かつ協働領域との連携の重要性について学ぶ。 精神医学の対象である精神障害及び精神障害者に関する概念について学ぶ。 我が国並びに諸外国の精神医学の歴史を学ぶ。 理学療法士としての総合病院での実務経験を活かし、精神医学の捉え方、内科や整形外科との違いとリハビリテーションの方法について講義する。							
到達目標	1 精神現象の異常を説明できる 2 精神疾患の概念について説明できる 3 精神疾患の症状について説明できる 4 精神疾患の治療について説明できる 5 精神障害者の社会復帰・自立について説明できる							
評価方法 基準	期末に筆記試験を行い、60点以上得点したものに単位を認定する。評価基準については学科の規定による。							
成績評価の フィードバック	授業中に質問に対して、随時フィードバックを行う。							
事前準備	☐ なし ☐ あり							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	精神医学とは	精神医学とは、社会文化とメンタルヘルス（精神科医療の現状と課題含む）	
2	精神障害の成因と分類	精神障害の成因と分類、精神機能の障害と精神症状	
3	統合失調症およびその関連障害	精神症状の特徴、病型、経過と予後、治療とリハビリテーション	
4	器質性精神障害、 症状性精神障害	認知症、大脳基底核変性障害、脳の感染症、中毒、代謝および栄養障害、膠原病、内分泌障害	
5	気分障害	うつ病、躁うつ病、気分障害	
6	てんかん、神経症性障害、生理的障害 および身体的要因に関連した障害	てんかん、摂食障害、睡眠障害	
7	精神作用物質による精神及び行動の障害、 パーソナリティ・行動・性の障害	アルコール関連精神障害、薬物依存、パーソナリティ障害、行動の障害、性の障害	
8	精神遅滞、心理的発達障害、コンサルテーション・リエゾン精神医学、 心身医学	精神遅滞、特異的発達障害、広汎性発達障害、コンサルテーション・リエゾン精神障害とは	
9	ライフサイクルにおける精神医学	小児期・青年期の精神医学、成人期の精神医学、初老期の精神医学、老年期の精神医学	
10	面接法	精神障害の評価と診断Ⅰ（面接）	
11	心理検査	精神障害の評価と診断Ⅱ（心理検査）	
12	精神障害の治療とリハビリテーション	薬物療法、身体療法	
13	精神障害の治療とリハビリテーション	精神療法、社会的治療・リハビリテーション	
14	精神科保健医療と福祉・職業リハビリテーション	歴史、精神保健福祉法の主な内容、障害者総合支援法の主な内容	
15	精神科保健医療と福祉・職業リハビリテーション	精神科医療の現状と課題、職業リハビリテーション	

履修区分	必修	単位数	4	開講時期	通年	形態	講義	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	60	対象年次	2
科目名	内科学 ☒ 実務経験のある教員による授業				担当者	小金澤 清文		
使用教材	なるほどなっとく！内科学、レジュメ							
科目概要	理学療法士にとって内科学を学ぶ意義は、患者の病態像を把握しリハビリテーション実施におけるリスクの回避にある。また、呼吸器疾患や循環器疾患などに特化したリハビリテーションが実施される中で、より専門的な内科的知識を持つ必要性が高まっている。本講義では国家試験に必要な内科学の知識の修得し、臨床場面でも知っているべき知識を身につける。 理学療法士の実務経験を活かし、呼吸器疾患や循環器疾患など個々の疾患の臨床症状や治療などについて解説し、国家試験および理学療法における必要な知識を講義する。							
到達目標	1. 各種内科疾患の病態を理解する。 2. 各種内科疾患の治療を理解する。 3. 疾患の病態を理解しリハビリ実施におけるリスクを考えられる。 4. 国家試験に合格するための知識を整理する。							
評価方法 基準	中間試験、期末試験、出席状況、授業態度、小テスト等を総合的に判断し、60点以上得点した者に単位を認定する。評価基準については学科の規定による。							
成績評価の フィードバック	期末試験の採点后、総合的な得点を各学生に知らせる。不合格者については、学籍番号のみを掲示する。							
事前準備	☒ なし ☐ あり							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	呼吸器疾患 1	呼吸器系の構造	
2	呼吸器疾患 2	呼吸器系の機能	
3	呼吸器疾患 3	呼吸器感染症・慢性閉塞性肺疾患	
4	呼吸器疾患 4	間質性肺疾患・呼吸不全	
5	循環器疾患 1	循環器の構造と機能	
6	循環器疾患 2	循環器疾患の症候と検査	
7	循環器疾患 3	心不全・不整脈	
8	呼吸器・循環器疾患	呼吸器・循環器疾患のまとめ	
9	循環器疾患 4	虚血性心疾患・心臓弁膜症	
10	循環器疾患 5	動脈疾患・静脈疾患	
11	消化器疾患 1	消化器の解剖と生理	
12	消化器疾患 2	消化器疾患の症候と検査・食道の疾患	
13	消化器疾患 3	胃・十二指腸・大腸の疾患	
14	肝・胆・膵疾患 1	肝・胆・膵の解剖と生理と症候	
15	肝・胆・膵疾患 2	肝・胆・膵疾患	

回	単元	内容	備考
16	高齢者 1	総論・加齢に伴う変化	
17	高齢者 2	高齢者に多い症候・老年症候群・認知症	
18	高齢者 3	高齢者に多い症候・フレイル・サルコペニア	
19	高齢者 4	循環器や呼吸器への影響	
20	代謝性疾患 1	代謝性疾患の生理・糖尿病	
21	代謝性疾患 2	肥満症・脂質異常症	
22	内分泌疾患 1	ホルモンの種類	
23	高齢者・代謝・内分泌疾患	高齢者・代謝・内分泌のまとめ	
24	内分泌疾患 2	下垂体・甲状腺疾患	
25	腎・泌尿器疾患 1	腎臓の解剖と生理・腎疾患の症候	
26	腎・泌尿器疾患 2	慢性腎臓病・腎不全	
27	血液疾患	血液の形態と機能・主な疾患	
28	膠原病・アレルギー疾患 1	アレルギーと自己疾患	
29	膠原病・アレルギー疾患 2	膠原病・関節リウマチ	
30	感染症	微生物の種類と特徴・主な疾患	

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	前期	形態	講義	
開講学科	理学療法学科（夜間過程）				配当時間	30	対象年次	2
科目名	小児科学 ☐ 実務経験のある教員による授業				担当者	斎藤 美都江		
使用教材	「標準理学療法・作業療法学 専門基礎分野 小児科学」（医学書院）							
科目概要	理学療法士国家試験における小児関連の問題は多くはない。しかし少子化の進む現在、健康な子どもたちにとっても成長を育む環境は厳しくなっている。本講義では子どもの正常な成長発達と代表的な疾患の知識の基礎を取り扱う。また理学療法士として将来障害、問題を抱える小児やそのご家族とのかかわりを深く考える機会とする。 看護師の実務経験を活かし、子どもの正常な成長発達と代表的な疾患の知識の基礎を取り扱う。また理学療法士として将来障害、問題を抱える小児やそのご家族とのかかわりを深く考える機会を提供する講義とする。							
到達目標	1. 正常な小児の成長発達を理解できる。 2. 現代の日本の子どもや小児医療が抱える問題を理解できる。 3. 小児の代表的な疾患を理解できる。 4. 療育を必要とする小児とのかかわり方を知る。							
評価方法 基準	前期末に筆記試験を行う。また受講態度は点数化し、筆記試験の得点に加減する。総合的に60点以上を得点した者に単位を認定する。評価基準については学科の規定による。							
成績評価の フィードバック	試験の採点後の点数開示及び不合格者の発表は学科の規定に従う。試験に関する疑問点などへの対応は学生の希望があれば実施する。							
事前準備	☐ なし ☐ あり							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	小児科学概論	成長・発育と発達①	
2	小児科学概論	成長・発育と発達②／小児の保健	
3	小児科学概論	不慮の事故と予防法	
4	診断と治療の概要	診断、検査、治療法	
5	診断と治療の概要	小児の救急蘇生法	
6	小児の疾患 (患児・家族との接し方)	新生児・未熟児疾患	
7	小児の疾患 (患児・家族との接し方)	感染症	
8	小児の疾患 (患児・家族との接し方)	免疫・アレルギー疾患、膠原病	
9	小児の疾患 (患児・家族との接し方)	血液・内分泌・神経・筋・骨系疾患	
10	小児の疾患 (患児・家族との接し方)	消化器・腎泌尿器・生殖器疾患	
11	小児の疾患 (患児・家族との接し方)	循環器・呼吸器疾患	
12	小児の疾患 (患児・家族との接し方)	児童虐待①	
13	小児の疾患 (患児・家族との接し方)	児童虐待②	
14	小児の疾患 (患児・家族との接し方)	先天異常・遺伝病・障がい児	
15	小児の疾患 (患児・家族との接し方)	腫瘍性疾患、子どもの死	

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	前期	形態	講義・演習	
開講学科	理学療法学科（夜間過程）				配当時間	30	対象年次	3年次
科目名	医療関連論 ☒ 実務経験のある教員による授業				担当者	各分野の非常勤講師		
使用教材	教科書・資料・プロジェクターなど							
科目概要	・オムニバス形式により、栄養学、臨床薬学、画像診断学、救急救命医学、予防の基礎を学習する。 ・授業は、それぞれ各専門の非常勤講師が行う。 各分野教員の実務経験を活かし、栄養学、臨床薬学、画像診断学、救急救命医学、予防の基礎について解説する。							
到達目標	健康、疾病及び障害について、その予防と発症・治療、回復過程に関する知識を習得し、理解力、観察力、判断力を養うとともに、高度化する医療ニーズに対応するため栄養学、臨床薬学、画像診断学、救急救命医学、予防の基礎を学ぶ。							
評価方法 基準	・規定の出席日数を満たす。 ・各授業において、それぞれ試験を行い6割以上の得点を合格とする。							
成績評価の フィード バック	試験結果を公表し、合格点に満たない学生に関しては、再試験を行う。							
事前準備	☒ なし ☐ あり							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	栄養学	食品の持つ栄養素や、その働き	
2	栄養学	食品の持つ栄養素や、その働き	
3	栄養学	食品の持つ栄養素や、その働き	
4	臨床薬学	薬物の基本的事項	
5	臨床薬学	対象疾患に対する薬物療法 薬物の副作用	
6	臨床薬学	対象疾患に対する薬物療法 薬物の副作用	
7	画像診断学	Xp・CT・MRI・超音波エコーなどの診 かた	
8	画像診断学	Xp・CT・MRI・超音波エコーなどの診 かた	
9	画像診断学	Xp・CT・MRI・超音波エコーなどの診 かた	
10	救急救命医学	救急医学の基礎	
11	救急救命医学	救急医学の基礎	
12	救急救命医学	救急法演習	
13	予防の基礎	予防の基礎・重要性	
14	予防の基礎	健康管理	
15	試験	期末試験	

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	後期	形態	講義・演習	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	30	対象年次	2
科目名	臨床心理学 ☐ 実務経験のある教員による授業				担当者	井波 敬三		
使用教材	『心理学・入門 ー心理学はこんなに面白い 改訂版』 サトウタツヤ・渡邊芳之（有斐閣アルマ） ほか適宜プリント（ワークシート）、資料配布する							
科目概要	講義および心理療法・心理テストの実践を行う。 心理学発展の歴史的背景、青少年の心理・発達課題などにも触れる。 国家試験および理学療法の臨床に資するよう、事例を取り上げ、ディスカッション等を交えながら解説を行う。 日本、米国での理学療法士としての実務経験を活かし、疾病罹患に起因する対象者・関係者の心理面に対する共感、配慮が適切なものとなるよう理解を促していく。							
到達目標	1. 臨床心理学理論や技法について学び、医療の臨床場面での患者理解に役立てることができる 2. 自分自身や他者への理解を深めることができる 3. 理学療法士国家試験出題範囲の内容について用語やその意味を把握する							
評価方法 基準	・ 中間試験、期末試験（いずれも筆記試験）の結果により60点以上を合格とする							
成績評価の フィードバック	中間試験、期末試験の答案は返却しない。 試験後、希望者に担任を通して成績を開示し、答案の閲覧を認める。 不合格者は学籍番号のみを掲示する。							
事前準備	☐ なし □ あり							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	イントロダクション	心、臨床心理学とは何か 障害の受容	
2	私	心理学、臨床心理学、精神医学の違い 公認心理士	
3	フロイト 1	精神分析	
4	フロイト 2	リビドー、エディプス・コンプレックス	
5	フロイト 3	防衛機制	
6	フロイト 4	転移	
7	ユング	分析心理学 ユングの無意識 内向的・外交的 箱庭	
8	中間試験	第1回～第7回授業範囲	
9	性格検査	性格検査 (投影法)	
10	アドラー	個人心理学 P-Fスタディ	
11	エリクソン	発達、アイデンティティー	
12	ピアジェ	認知発達	
13	記憶と学習	記憶の分類 条件付け	
14	心理療法 1	様々な心理療法	
15	心理療法 2	現代の心理療法 認知行動療法、来談者中心療法	

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	通年	形態	講義	
開講学科	理学療法学科（夜間過程）				配当時間	30	対象年次	1年次
科目名	リハビリテーション概論 ☐ 実務経験のある教員による授業				担当者	田村俊太郎		
使用教材	テキスト「理学療法評価学」およびプリント配布							
科目概要	理学療法の実務経験を活かし脳血管障害などの中枢神経系や大腿骨頸部骨折などの代表的な疾患や障害像を通してリハビリテーションを行う上での基礎知識や技術、最新のアプローチ等について学ぶ。 また、理学療法士として患者にどのように関わるかチーム医療とはどのようなものを意味するのかなど幅広いものの考え方について学ぶ。							
到達目標	1.チーム医療、リハビリテーションの目的、疾患別の障害像を理解する 2.各病期ごとのリハビリテーションについて理解する 3.疾患について理解する 4.疾患ごとのリハビリテーションについて理解する 5.患者に対する精神的・肉体的かわりかたを理解する 6.理学療法士が関わることについて考えを深める							
評価方法 基準	期末試験を行う（記述および選択問題）							
成績評価の フィードバック	試験採点后個人に対し個別にフィードバックする							
事前準備	☐ なし ☒ あり							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	リハビリテーションの理解	チーム医療、目標、障害像について	
2	病期別リハビリテーション	急性期・回復期・生活期・終末期 リハビリテーションについて	
3	疾患についての理解①	脳血管障害総論	
4	疾患についての理解②	脳出血の病態	
5	疾患についての理解③	脳出血の病態とリハビリテーション	
6	脳血管障害像	脳梗塞の病態	
7	疾患についての理解④	脳梗塞の病態とリハビリテーション	
8	疾患についての理解⑤	くも膜下出血の病態とリハビリテーション	
9	疾患についての理解⑥	大脳基底核障害とリハビリテーション	
10	中枢・末梢神経障害	神経システムごとの特徴と主な疾患	
11	疾患についての理解⑦	各種骨折に対するリハビリテーション (上肢・体幹)	
12	疾患についての理解⑧	各種骨折に対するリハビリテーション (下肢)	
13	疾患についての理解⑨	変形性関節症に対するリハビリテーション	
14	疾患についての理解⑩	その他 リハビリテーションの対象となる整形外科疾患	
15	期末試験		

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	後期	形態	講義	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	30	対象年次	1
科目名	社会保険の知識 ☐ 実務経験のある教員による授業				担当者	小野 浩		
使用教材	地域理学療法学 第3版（医歯薬出版株式会社）,世界一わかりやすい介護保険のきほんとしくみ（ソシム株式会社）,教員作成資料他							
科目概要	地域包括ケアシステムの推進に伴い、社会における理学療法の役割は大きくなっている。このような時代背景から社会保険制度をはじめとする制度を理解した上で理学療法を実施する事は非常に大切である。本講義では理学療法と関連が深い介護保険制度を中心に学習し、地域や社会に求められる理学療法について理解を深める。 理学療法士の実務経験を活かし、介護保険や医療保険を中心とする社会保険に関する知識や仕組みを講義し、国家試験および臨床現場で必要な知識・技能の習得を図る。							
到達目標	①理学療法と関連がある法制度について説明できる。 ②介護保険制度の概要について説明できる。 ③介護保険制度における理学療法の役割について説明できる。 ④地域包括ケアシステムについて概説できる。							
評価方法 基準	授業態度や出席状況10点、課題発表10点、筆記試験80点の3項目合計で成績判定し、60点以上を合格とする。							
成績評価の フィードバック	小テスト採点後に解説を行う。期末試験不合格者については学籍番号のみ提示とする。							
事前準備	☐ なし ☒ あり 使用教科書を事前に読み予習を行うのが望ましい。							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	オリエンテーション	社会保険制度の概要を学習する	
2	地域包括ケアシステム①	地域包括ケアシステムについて概要を理解する	
3	地域包括ケアシステム②	地域包括ケアシステムの推進に伴う理学療法のあり方について学習する	
4	介護保険制度	介護保険の概要を理解する	
5	障害者福祉における地域理学療法	障害者総合支援法のポイントを理解し、支援方法について学習する	
6	地域における社会資源	フォーマルサービスとインフォーマルサービスの分類ができる	
7	介護保険下での地域理学療法①	介護保険制度の理解を深める	
8	介護保険下での地域理学療法まとめ	介護保険下での地域理学療法の展開について学習し、理解する	
9	施設と在宅生活でのリハビリテーション	施設サービスと居宅サービスの理解を深める	
10	地域環境	地域環境についての理解	
11	公共交通	公共交通について学び、ユニバーサルデザインの実践についての理解	
12	高齢者の在宅支援について	時代背景を踏まえた在宅支援の重要性についての理解	
13	高齢者の在宅支援サービス	理学療法士が関わる在宅支援サービスの実際	
14	福祉用具の選定	福祉用具の理解を深め、適切な介入を学ぶ	
15	福祉用具をはじめとする環境整備の実際	症例に応じた環境整備の理解	

履修区分	必修	単位数	1	開講時期	後期	形態	演習	
開講学科	理学療法学科（昼間課程）				配当時間	30	対象年次	1
科目名	運動学演習 ☒ 実務経験のある教員による授業				担当者	横山 大輝 藤崎 和希		
使用教材	PT・OTビジュアルテキスト専門基礎運動学、 運動療法のための機能解剖学的触診技術、配布資料							
科目概要	この科目では、運動学の基本的な概念や原理を実際の身体運動に応用する方法を学びます。関節や筋肉の構造と機能、姿勢や歩行のメカニズム、身体運動の測定や解析などについて、演習を通して理解を深めます。また、理学療法士として身体運動を評価や指導するために必要な技能や知識を身につけます。 理学療法士の実務経験を活かし、身体の運動に関わる仕組みや働きについて解説し、理学療法における必要な知識の統合を図る。							
到達目標	1. 運動学の基本的な用語や概念を正しく説明できる。 2. 人体の各関節や筋肉の構造と機能を理解し、それらが身体運動にどのように関与するかを説明できる。 3. 姿勢や歩行などの身体運動のメカニズムを分析し、その特徴や問題点を指摘できる。 4. 身体運動の測定や解析に必要な機器や方法を選択し、正確に操作できる。 5. 身体運動の測定や解析の結果をもとに、理学療法士として適切な評価や指導が							
評価方法 基準	中間テスト、期末テストの点数から総合的に評価する。（8割） 発表はピア評価、グループ評価を実施し採点化する。（2割）							
成績評価の フィード バック	各單元ごとの小テストの返却及び解説の実施。 本試験採点后、点数と内容を個別説明する。不合格者に関しては、学籍番号のみを掲示。							
事前準備	☒ なし ☐ あり 前回講義までの内容を復習しておく。 既に学習している運動学について、理解を深めておく。							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	イントロダクション	運動学演習の概要と目的	
2	関節と筋肉の構造と機能①	上肢の関節機能を理解するためのケーススタディ	
3	関節と筋肉の構造と機能②	上肢の関節機能を理解するためのケーススタディ	
4	触察	筋の触診（上肢）	
5	触察	筋の触診（下肢）	
6	関節と筋肉の構造と機能③	下肢の関節機能を理解するためのケーススタディ	
7	関節と筋肉の構造と機能④	体幹の関節機能を理解するためのケーススタディ	
8	まとめ	授業のまとめ	
9	関節と筋肉の構造と機能⑥	体幹の関節機能を理解するためのケーススタディ	
10	身体運動の測定方法①	検査機器を用いた測定と解釈	
11	身体運動の測定方法②	検査機器を用いた測定と解釈	
12	理学療法における運動学的アプローチ①	事例紹介	
13	理学療法における運動学的アプローチ②	グループワーク	
14	理学療法における運動学的アプローチ③	発表とフィードバック	
15	まとめ	運動学演習のまとめと振り返り	

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	前期	形態	講義	
開講学科	理学療法学科（夜間過程）				配当時間	30	対象年次	1年次
科目名	理学療法概論Ⅰ ☒ 実務経験のある教員による授業				担当者	根上 雅臣		
使用教材	PTスタートガイド 基礎理学療法概論（メディカルビュー社）							
科目概要	理学療法士の意義、役割を確認し、職務内容について概観していくと同時に、理学療法に対する理解を深めていく。 今後4年間に行う学習内容について概略を話すとともに、自己学習能力を高めていく。 総合病院・一般病院・施設および地域での実務経験を活かし、中枢神経疾患、整形外科疾患、切断、脊髄損傷、小児及び地域包括ケアシステムなど具体的な理学療法士の職務内容を経験談を取り入れながら解説する。							
到達目標	1) 理学療法の主な領域について説明できる。 2) 理学療法士と関わる多職種について理解する。 3) 理学療法の対象となる病態について理解する。 4) 理学療法の対象となる疾患について理解する。 5) 一般の人に理学療法について平易に説明できる。							
評価方法 基準	課題レポート、小テスト、筆記試験終了後に個人指導を行う。							
成績評価の フィードバック	テキストの予習、復習をしっかりとって授業に臨むこと。							
事前準備	☐ なし ☒ あり テキストの予習、復習をしっかりとって授業に臨むこと。							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	イントロダクション（1）	授業の概要、理学療法士の仕事、法規	
2	イントロダクション（2）	コミュニケーション	
3	理学療法の対象の理解（1）	脳卒中片麻痺	
4	理学療法の対象の理解（2）	神経・筋疾患	
5	理学療法の対象の理解（3）	脳性麻痺	
6	理学療法の対象の理解（4）	変形性股関節症	
7	理学療法の対象の理解（5）	脊髄損傷	
8	中間試験	中間試験	
9	理学療法の対象の理解（6）（7）	循環器疾患、糖尿病	
10	理学療法の方法（1）	老年症候群	
11	理学療法の方法（2）	筋力	
12	理学療法の方法（3）	関節可動域	
13	理学療法の方法（4）	バランス①	
14	理学療法の方法（5）	バランス②	
15	臨床実習	クリニカルクラークシップ	

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	後期	形態	実技	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	30	対象年次	3
科目名	理学療法概論Ⅱ ☒ 実務経験のある教員による授業				担当者	学科教員		
使用教材	PT・OTのための臨床技能とOSCEコミュニケーションと介助・検査測定編（第2版補訂版）／PT・OTのための臨床技能とOSCE機能障害・筋力低下への介入編（第2版）							
科目概要	理学療法士の実務経験を活かし、臨床実習や卒後の臨床活動において、重要度の高いと思われる、評価技術・接遇対応・臨床推論・治療技術を一連の流れで捉えられるように、一人の患者様への応対技術を学内で学習・体験させていく。また、評価能力・臨床推論能力・考察能力が必要となるため、1年・2年で行った検査・測定技術や結果の解釈について解説する。							
到達目標	1. 各評価を正しく実施することが出来る。 2. 患者様への説明を含めた接遇面での配慮が、円滑丁寧に行える。 3. 評価した結果から、患者様の全体像を作り上げることが出来る。 4. 問題点の抽出やプログラムの立案を、適切に行うことが出来る。 5. プログラムの実施を適切に行える。							
評価方法 基準	後期末にポートフォリオを提出させルーブリックを用いて採点、後期末に実技試験を行い総合的に判断する。 総合点数で60点以上になった者には単位を認定する。 評価基準に関しては学科の規定による。							
成績評価の フィードバック	試験採点后、点数と内容を個別説明する。 不合格者に関しては、学籍番号のみを掲示する。							
事前準備	☒ なし ☐ あり							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	オリエンテーション 各種検査①	態度、バイタルサイン、感染対策	
2	各種検査②	形態測定、関節可動域測定、徒手筋力検査など	
3	各種検査③	運動器疾患	
4	各種検査④	脳血管疾患	
5	日常生活関連動作①	日常生活活動の介助や誘導方法	
6	日常生活関連動作②	各疾患における異常パターンの理解	
7	症例検討（運動器）1	運動器疾患に対する評価結果を解釈し運動療法を実施する	
8	症例検討（運動器）2	運動器疾患に対する評価結果を解釈し運動療法を実施する	
9	症例検討（運動器）3	運動器疾患に対する評価結果を解釈し運動療法を実施する	
10	症例検討（内部障害）1	内部障害に対する評価結果を解釈し運動療法を実施する	
11	症例検討（内部障害）2	内部障害に対する評価結果を解釈し運動療法を実施する	
12	症例検討（内部障害）3	内部障害に対する評価結果を解釈し運動療法を実施する	
13	症例検討（中枢）1	中枢神経疾患に対する評価結果を解釈し運動療法を実施する	
14	症例検討（中枢）2	中枢神経疾患に対する評価結果を解釈し運動療法を実施する	
15	症例検討（中枢）3	中枢神経疾患に対する評価結果を解釈し運動療法を実施する	

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	前期	形態	講義	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	30	対象年次	2
科目名	臨床運動学 ☐ 実務経験のある教員による授業				担当者	黒岩 平		
使用教材	15レクチャーシリーズ 理学療法・作業療法テキスト 臨床運動学（中山書店）/ 動作分析 臨床活用講座（メディカルビュー）							
科目概要	基礎運動学で習得した基礎的知識・技術を踏まえ、臨床場面での動作を分析し問題点の理解ができるように学習する。また、運動機能障害を運動学的に説明できるようにする。 理学療法士としての実務経験を活かし、各動作のメカニズムについて解説し、国家試験及び理学療法評価における知識を講義する。							
到達目標	1. 寝返り動作のメカニズムを理解し動作を説明することができる。 2. 起き上がり動作のメカニズムを理解し動作を説明することができる。 3. 起立・着座動作のメカニズムを理解し動作を説明することができる。 4. 歩行動作のメカニズムを理解し動作を説明することができる。 5. 関節運動学を理解し、運動機能障害について説明することができる。							
評価方法 基準	筆記試験の結果と授業評価（態度や課題提出状況）などから総合的に判断する。 中間試験及び期末試験それぞれ60点以上で合格とする。							
成績評価の フィードバック	試験採点后、点数と内容を個別説明する。 不合格者に関しては、学生番号のみを掲示。							
事前準備	☐ なし ☒ あり 運動学の復習を行っておくこと。							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	総論	臨床運動学について学ぶ	
2	寝返り動作	寝返り動作の概要や動作のメカニズムについて学ぶ	
3	寝返り動作分析	動作のメカニズムを阻害する原因を評価し、寝返り動作分析を行う	
4	起き上がり動作	起き上がりの概要や動作のメカニズムについて学ぶ	
5	起き上がり動作分析	動作のメカニズムを阻害する原因を評価し、起き上がり動作分析を行う	
6	起立・着座動作	起立・着座動作の概要や動作のメカニズムについて学ぶ	
7	起立・着座動作分析	動作のメカニズムを阻害する原因を評価し、起立・着座動作分析を行う	
8	中間試験	中間試験	
9	歩行動作について	歩行運動学の復習を行い、メカニズムについて学ぶ	
10	歩行動作分析	歩行動作の概要やメカニズムを阻害する原因を評価し、歩行分析を行う	
11	歩行動作分析	各疾患に対する歩行分析を行う	
12	歩行動作分析	各疾患に対する歩行分析を行う	
13	歩行動作分析	各疾患に対する歩行分析を行う	
14	歩行動作分析	異常歩行を考える	
15	前期まとめ	前期の講義内容をまとめ復習を行う	

履修区分	必修	単位数	1	開講時期	後期	形態	講義・演習	
開講学科	理学療法学科				配当時間	30	対象年次	2年次
科目名	理学療法管理学				担当者	根上 雅臣		
	☑ 実務経験のある教員による授業							
使用教材	テキスト（リハビリテーション管理学）・教員作成の資料							
科目概要	リハビリテーション部門の管理者としての実務経験を活かし、医療福祉その他様々な職場で働いている。理学療法士がより質の高い理学療法を提供するには勤務するそれぞれの部門での運営管理や他職種との連携が必要となる。「理学療法管理学」では基本的な管理運営, 各組織の特徴, 理学療法部門の管理運営, 社会保障制度の必要性やその仕組み, 予防・保健, 職業倫理, リスクマネジメントなどについて学ぶ。 一般病院リハビリテーション部門の責任者として、また地域の介護予防の実務経験を活かし、健康保険制度・介護保険制度、予防・保健, 職業倫理, リスクマネジメントなどについて解説する。							
到達目標	1) 理学療法部門の管理・運営に関する基本的知識を学習し、説明できる。 2) 理学療法部門の報酬体系を学習し、仕組みを説明できる。 3) 理学療法部門の職業倫理について説明できる。 4) 理学療法部門の業務管理について説明できる。 5) 理学療法部門のリスク管理を学習し、説明できる。							
評価方法 基準	期末に筆記試験を行い出席状況, 学習態度等を加味し, 筆記試験と総合的に判断する。総合点数で60点以上になった者には単位を認定する。							
成績評価の フィードバック	採点后, 個別に点数と内容を説明する。必要に応じて学生個人のレベルに合わせたフィードバックを行う。							
事前準備	☐ なし ☒ あり 理学療法概論, 地域理学療法学など, 医療保険とともに介護保険の知識や社会制度について学んだところをもう一度整理しておく。							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	社会保障制度	社会保障制度とは	
2	医療・保健	予防・保健	
3	職業倫理	職業倫理	
4	関連する法律	身分法と倫理綱領	
5	業務管理	病院・施設の組織	
6	業務管理	療法士の業務	
7	業務管理	コンプライアンス・労務管理	
8	中間試験	中間試験	
9	業務管理	組織マネジメント	
10	他職種連携	他職種連携①	
11	他職種連携	他職種連携②	
12	地域連携	地域連携	
13	医療の質的保証	医療の質	
14	リスクマネジメント	リスクマネジメント	
15	ハラスメント	ハラスメント	

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	通年	形態	講義・演習	
開講学科	理学療法学科				配当時間	60	対象年次	1年次
科目名	評価学Ⅰ ☐ 実務経験のある教員による授業				担当者	徳永義隆		
使用教材	テキスト「理学療法評価学」およびプリント配布							
科目概要	評価学Ⅰでは理学療法士としての病院や老人施設での実務経験を活かし理学療法士が患者に対して行う各種評価について、その評価内容や評価技術を学ぶ。この科目では種々の評価の中から前期で「形態測定」後期で「関節可動域測定」についてその目的、測定の仕方、測定結果の記録の仕方さらに考察まで幅広く学ぶ。また国家試験合格レベルの幅広い知識を身に着ける。							
到達目標	1.形態測定の意義と目的を理解し説明できる 2.形態測定、関節可動域測定の種類を言える 3.形態測定、関節可動域測定上の注意事項を言える 4.身長・体重、各関節の可動域を測定できる 5.四肢長・肢節長および周径の測定ができる 6.形態の異常について理解し考察できる							
評価方法 基準	前期後期それぞれ中間試験及び期末試験を行い、総合的に平均60点以上を合格とし単位を認定する							
成績評価の フィードバック	試験採点后個人に対し個別にフィードバックする							
事前準備	☐ なし ☒ あり							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	形態測定の意義と目的	形態測定の目的および内容についての説明	
2	形態測定の種類	5種類の測定項目について説明	
3	形態測定上の注意事項	注意事項6項目について説明	
4	身長・体重の測定	身長計・体重計などを用いた測定法	
5	栄養状態と体格指数	8種類の体格指数について学ぶ	
6	四肢長および肢節長①	上肢長・上肢実用長・上腕長・前腕長測定	
7	四肢長および肢節長②	手長・下肢長・下肢実用長・大腿長・下腿長	
8	四肢長および肢節長③	足長・指極・切断端長	
9	周径測定の意義と目的	周径測定についての基礎知識	
10	周径①	上腕周径・前腕周径・大腿周径・下腿周径	
11	周径②	指の太さ、特殊な測定法	
12	周径③	頭囲・胸囲・腹囲・殿囲	
13	切断端周径	上腕・前腕切断端周径 大腿・下腿切断	
14	肢長・周径からの考察	各測定結果から異常について考察する	
15	前期期末試験		

回	単元	内容	備考
16	関節可動域測定の意味目的	関節可動域測定の意味・目的の説明	
17	関節可動域制限	可動域が低下する原因について解説	
18	基本的肢位と運動方向	測定時の肢位および関節運動方向	
19	関節可動域表示	測定値の表示法・記載法の説明	
20	測定器具	ゴニオメーター他測定器具の説明・使用法	
21	測定上の注意と正常可動域	角度計の当て方、正常可動域の説明	
22	測定の実際①	肩関節屈・伸、内・外旋、内・外転	
23	測定の実際②	肩関節水平屈・伸、肘関節屈・伸、回内外	
24	測定の実際③	手関節掌・背屈、橈・尺屈、手指関節	
25	測定の実際④	母指屈・伸、内・外転、対立	
26	測定の実際⑤	手指屈伸、内外転、三関節角度計の使用法	
27	測定の実際⑥	股関節屈伸、内外旋、内外転、膝屈伸	
28	測定の実際⑦	足部屈伸、内・外返し、内外転、足趾	
29	臨床応用	頸部・体幹の全運動方向 可動域制限についての考察	
30	後期期末試験		

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	通年	形態	実技	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	60	対象年次	1
科目名	評価学Ⅱ ☐ 実務経験のある教員による授業				担当者	新井清代		
使用教材	津山直一（訳）：「新・徒手筋力検査法 10 版」． 協同医書出版． 2020							
科目概要	理学療法士の実務経験を活かし、理学療法における筋力測定から評価の流れについて理解し、 理学療法評価に必要なとなる基本的な筋力測定方法の意義や技能を習得する。							
到達目標	①評価と筋力測定の意義につて理解する ②下肢、顔面の筋力測定を行うことができる ③筋力測定と疾患とのつながりを理解し模擬症例から異常動作を予測できる ④機器による筋力測定の意義,方法について理解する ⑤上肢、頸部、体幹筋の筋力測定を行うことができる ⑥国家試験に出る筋力測定の出題傾向を理解する							
評価方法 基準	前期；授業態度（出席状況）5点,レポート提出10点,確認実技試験85点満点の合計3つで採点し 6 0 点以上を合格とする 後期；授業態度（出席状況）5点,筆記試験35点,実技試験60点満点の合計3つで採点し 6 0 点以上を合格とする							
成績評価の フィードバック	期末試験不合格者については学籍番号のみ提示とする.再試験受験者に対しては補講を行った後再度実技試験を行う．							
事前準備	☐ なし ☒ あり 解剖学で学習した筋肉の起始,停止や支配神経を復習しておくとともに発表する班は測定する筋に関連する疾患を参考書で事前に予習する．							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	評価と筋力測定の意義	評価と筋力測定の意義,今後の授業発表のデモンストレーション	
2	股関節屈曲,屈曲・外転・外旋,伸展の筋力測定	筋肉の起始,停止の復習と関連する疾患と該当する筋肉との関係を理解し測定方法を習得する	
3	股関節外転,股関節屈曲位からの外転の筋力測定	筋肉の起始,停止の復習と関連する疾患と該当する筋肉との関係を理解し測定方法を習得する	
4	股関節内転,外旋の筋力測定	筋肉の起始,停止の復習と関連する疾患と該当する筋肉との関係を理解し測定方法を習得する	
5	股関節内旋,膝関節屈曲の筋力測定	筋肉の起始,停止の復習と関連する疾患と該当する筋肉との関係を理解し測定方法を習得する	
6	膝関節伸展,足関節底屈の筋力測定	筋肉の起始,停止の復習と関連する疾患と該当する筋肉との関係を理解し測定方法を習得する	
7	足関節背屈並びに内がえし,内がえしの筋力測定	筋肉の起始,停止の復習と関連する疾患と該当する筋肉との関係を理解し測定方法を習得する	
8	足関節底屈外がえしの筋力測定	筋肉の起始,停止の復習と関連する疾患と該当する筋肉との関係を理解し測定方法を習得する	
9	機器による筋力測定	等速運動測定機器と手持ち筋力計を用いた筋力測定方法とデータの解釈	
10	下肢の筋力測定復習	今まで行った下肢筋力測定の復習	
11	顔面の筋力測定	脳神経検査のうち運動系の範囲である表情筋の筋力測定	
12	症例検討	模擬症例から考えられる異常歩行を考察	
13	実技練習	期末実技試験に備え練習	
14	実技試験	1～4コマかけ教員と全員が実技試験を行う	
15	実技試験	1～4コマかけ教員と全員が実技試験を行う	

回	単元	内容	備考
16	下肢筋力測定復習	1年次学習した下肢筋力テスト総復習を行う	
17	肩甲骨外転上方回旋,挙上,内転の筋力測定	筋肉の起始,停止の復習と関連する疾患と該当する筋肉との関係を理解し測定方法を習得する	
18	肩甲骨下制と内転,内転と下方回旋,下制の筋力測定	筋肉の起始,停止の復習と関連する疾患と該当する筋肉との関係を理解し測定方法を習得する	
19	肩関節屈曲,伸展,外転の筋力測定	筋肉の起始,停止の復習と関連する疾患と該当する筋肉との関係を理解し測定方法を習得する	
20	肩関節水平外転,水平内転,外旋,内旋の筋力測定	筋肉の起始,停止の復習と関連する疾患と該当する筋肉との関係を理解し測定方法を習得する	
21	肘関節屈曲,伸展,前腕回内,回外の筋力測定	筋肉の起始,停止の復習と関連する疾患と該当する筋肉との関係を理解し測定方法を習得する	
22	手関節屈曲,伸展の筋力測定と上肢筋力測定復習	筋肉の起始,停止の復習と関連する疾患と該当する筋肉との関係を理解し測定方法を習得する	
23	手指筋力測定	筋肉の起始,停止の復習と測定方法を習得する	
24	頸部筋力測定	筋肉の起始,停止の復習と関連する疾患と該当する筋肉との関係を理解し測定方法を習得する	
25	体幹筋力測定	筋肉の起始,停止の復習と関連する疾患と該当する筋肉との関係を理解し測定方法を習得する	
26	実技総復習	下肢筋力測定を含めた範囲での実技総復習	
27	筆記問題解説	国家試験筋力測定で出題範囲の解説	
28	実技試験練習	期末実技試験練習	
29	筆記試験	事前配布した国試問題内容から出題する筆記試験を行う	
30	実技試験練習	期末実技試験練習	

回	単元	内容	備考
31	期末実技試験	1～4コマかけ教員と全員が実技試験を行う	

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	通年	形態	講義・演習	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	90	対象年次	2
科目名	評価学Ⅲ ☐ 実務経験のある教員による授業				担当者	黒岩平		
使用教材	PTOTビジュアルテキストリハビリテーション基礎評価学（羊土社）／適切な治療を導くための整形外科徒手検査法（メディカルビュー）							
科目概要	患者の身体状態の評価の基礎となる、バイタルチェック、種々の感覚検査、深部腱反射、整形外科徒手検査法の意味と理論、実施方法と結果の考察について学び、正しい実技を行えるようになる。 理学療法士としての実務経験を活かし、バイタルチェック、種々の感覚検査、深部腱反射、整形外科のスペシャルテストの意味と理論、実施方法と結果の考察について講義し、患者に実践できるよう正しい実技を習得する訓練を行う。							
到達目標	患者のランドマークの触診ができる。バイタルチェックが出来、訓練してよいか悪いかの判断が出来る。腱反射検査、病的反射検査の意味と実施及び結果の解析が出来る。感覚検査の意義と実施及び結果の判定が出来る。各種整形外科テストの意義と実施及び結果の判定が出来る。							
評価方法 基準	前期、後期ともに実技試験及び筆記試験（中間+期末）にて判断する。 総合点数で60点以上になった者には単位を認定する。							
成績評価の フィードバック	試験採点后、点数と内容を個別説明する。 不合格者に関しては、学籍番号のみを掲示。							
事前準備	☐ なし ☒ あり 前期は運動学や解剖、触診の教科書を見ておくこと 後期は前期で学習した整形外科学の復習をすること							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	総論	理学療法評価についての基礎を学ぶ	
2	触診技術	ランドマークや骨・筋の触診方法を学ぶ	
3	触診技術	ランドマークや骨・筋の触診方法を学ぶ	
4	触診技術	ランドマークや骨・筋の触診方法を学ぶ	
5	バイタルサイン	血圧、脈拍、呼吸数の測定方法を学ぶ	
6	感覚検査	感覚障害の起こるしくみと疾患ごとの特性について学ぶ	
7	感覚検査	感覚障害を把握する検査の基本を学ぶ	
8	中間試験	中間試験	
9	反射検査と筋緊張	反射検査や筋緊張検査の方法を理解し実施	
10	反射検査と筋緊張	反射検査や筋緊張検査の方法を理解し実施	
11	姿勢バランス検査	実際のバランス検査の概要を学ぶ	
12	姿勢バランス検査	実際のバランス検査の方法を学ぶ	
13	疾患特異的機能評価	代表的な疾患に対する検査を理解し実施する	
14	疾患特異的機能評価	代表的な疾患に対する検査を理解し実施する	
15	総復習	前期で学習した評価実技をまとめる	

回	単元	内容	備考
16	総論 頸部の整形外科テスト	整形外科テストの意義を学ぶ。頸部の整形外科テストの理論と実施方法の実際を学ぶ。	
17	胸郭出口症候群の整形外科テスト	胸郭出口症候群の整形外科テストの理論と実施方法の実際を学ぶ。	
18	肩関節の整形外科テスト①	肩関節の整形外科テストの理論と実施方法の実際を学ぶ。	
19	肩関節の整形外科テスト②	肩関節の整形外科テストの理論と実施方法の実際を学ぶ。	
20	肘関節の整形外科テスト	肘関節の整形外科テストの理論と実施方法の実際を学ぶ。	
21	前腕・手関節の整形外科テスト	前腕・手関節の整形外科テストの理論と実施方法の実際を学ぶ	
22	上半身のまとめ 症例提示	上半身の整形外科テストの総復習 症例から考えられる整形外科テストの立案	
23	中間試験	中間試験	
24	腰部の整形外科テスト	腰部の整形外科テストの理論と実施方法の実際を学ぶ	
25	骨盤帯の整形外科テスト	骨盤帯の整形外科テストの理論と実施方法の実際を学ぶ。	
26	股関節の整形外科テスト	股関節の整形外科テストの理論と実施方法の実際を学ぶ。	
27	膝関節の整形外科テスト①	膝関節の整形外科テストの理論と実施方法の実際を学ぶ。	
28	膝関節の整形外科テスト②	膝関節の整形外科テストの理論と実施方法の実際を学ぶ。	
29	足関節の整形外科テスト	足関節の整形外科テストの理論と実施方法の実際を学ぶ。	
30	下半身のまとめ症例提示	下半身の整形外科テストの総復習 症例から考えられる整形外科テストの立案	

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	通年	形態	講義・演習	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	60	対象年次	2
科目名	評価学Ⅳ ☐ 実務経験のある教員による授業				担当者	横山 雅人		
使用教材	①リハビリテーション基礎評価学第2版／②病気が見える 脳と神経 第2版,メディックメディア／③脳卒中の機能評価 SIASとFIM,金原出版／④臨床動作分析,メジカルビュー／⑤リハビリテーションビジュアルブック,学研							
科目概要	神経障害の必要な基礎知識（基本病態・機能局在・脳血流灌流・伝導路）を理解した上で、基礎的評価（検査・測定）となる、片麻痺機能検査、筋緊張検査、協調性検査、脳神経検査、バランス検査の理論と実施方法について学ぶ。また、神経障害における姿勢や動作の特徴を理解し、その観察・分析方法を学ぶ。 理学療法士としての実務経験を活かし、脳画像からの機能予測、検査項目の選択、臨床の沿った検査方法の習得を図る。							
到達目標	1. 脳血管障害の基本病態、脳の機能局在、血流灌流、伝導路が理解できる。 2. 神経障害の基本的検査・測定が実施できる。 3. 脳卒中患者の姿勢や動作が理解できる。 4. 神経障害における一連の理学療法過程が理解できる。 5. 神経障害における統合と解釈について理解できる。							
評価方法 基準	実技テスト・小テスト・課題、ポートフォリオ、前期（中間・期末）及び後期（中間・期末）の試験から総合的に判断する。また、受講態度・参加・貢献なども考慮する。下記の割合で総合的に6割以上の者に単位を認定する。再試験の対象者は期末テストを含め、下記の割合で算出され結果において 6 割未満の者とする。【期末テスト60%、実技・小テスト・課題15%、ポートフォリオ20%、授業参加・貢献5%】 ※中間テストの場合はテスト100%							
成績評価の フィード バック	科目評価結果、試験得点については希望者に知らせる（問題・答案は基本的に非公開）。 不合格者については、学籍番号のみを掲示する。							
事前準備	☐ なし ☒ あり 授業の受講条件：下記 ・神経障害に関する解剖学や生理学などを再学習しておくことを望む。 ・実技の際は運動できる格好で授業の望むこと（従えない場合は退出となる）。 ・教員の提示するルールを守り、指示に従うこと（従えない場合は退出となる）。 ※授業進度によって授業計画が変更する場合、補講を実施する							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	科目オリエンテーション 神経の機能と構造	ポートフォリオの説明 脳の機能、運動に関わる脳の機能局在を理解する	主な教材 ②
2	PTに関連する基本的な 神経の機能と構造	脳の連絡線維・断面図 ウィルス動脈輪・運動発現モデル	主な教材 ②
3	PTに関連する基本的な 神経の機能と構造	脳血流灌流分布と機能局在 運動・感覚の伝導路を理解する	主な教材 ②
4	PTに関連する基本的な 神経の機能と構造	脳血流灌流分布と機能局在 運動・感覚の伝導路を理解する	主な教材 ②
5	PTに関連する基本的な 神経の機能と構造	脳血流灌流分布と機能局在 運動・感覚の伝導路を理解する	主な教材 ②
6	片麻痺機能検査	神経障害を評価するために必要な神経の機能と構造	主な教材 ②
7	片麻痺機能検査	・片麻痺機能評価の基礎知識 ・中枢と末梢神経障害の回復過程の違い	主な教材 ①②
8	PTに関連する基本的な 神経の機能と構造	中間テスト：PTに関連する 基本的な神経障害の機能と構造	
9	片麻痺機能検査	・Brunnstrom Stageの各検査方法 上肢・手指・下肢	主な教材 ①②
10	片麻痺機能検査	・Brunnstrom Stageの各検査方法 上肢・手指・下肢	主な教材 ①②
11	片麻痺機能検査	・Brunnstrom Stageの各検査方法まとめ 上田の12段階グレードとの関連について	主な教材 ①②
12	筋緊張検査	・筋緊張について ・異常筋緊張の発生機序	主な教材 ①②
13	筋緊張検査	・被動性検査の方法を学ぶ ・Modified Ashworth Scale (MAS)	主な教材 ①②
14	脳神経検査	・脳神経検査に必要な知識を理解し、検査測定方法を学ぶ	主な教材 ①②
15	脳神経検査	・脳神経検査に必要な知識を理解し、検査測定方法を学ぶ	主な教材 ①②

回	単元	内容	備考
16	協調性検査	・ 協調運動障害・運動失調の定義の違い	主な教材 ①
17	協調性検査	・ 具体的協調性検査の方法 ・ 躯幹協調機能ステージ	主な教材 ①
18	高次脳機能検査	・ 高次脳機能障害の特徴と原因病巣 ・ 高次脳機能障害検査の実施	主な教材 ①
19	高次脳機能検査	・ 高次脳機能障害の特徴と原因病巣 ・ 高次脳機能障害検査の実施	主な教材 ①
20	高次脳機能検査	・ 高次脳機能障害の特徴と原因病巣 ・ HDS-R・MMSE／注意障害／USN／フッシャー	主な教材 ①
21	高次脳機能検査	・ 高次脳機能障害の特徴と原因病巣 ・ HDS-R・MMSE／注意障害／USN／フッシャー	主な教材 ①
22	バランス検査	・ 姿勢調節とバランス／バランスの理論的背景 ・ バランス評価の難易度設定方法を学ぶ	主な教材 ①
23	協調性検査 高次脳機能検査	中間テスト：協調性検査／高次脳機能検査	
24	バランス検査	・ 座位位バランス検査方法を学ぶ (静的・動的・外乱負荷応答)	主な教材 ①
25	バランス検査	・ 立位バランス検査方法を学ぶ (静的・動的・外乱負荷応答)	主な教材 ①
26	バランス検査	・ バランスのパフォーマンステストを学ぶ ・ BBS、FR、TUG、BesTest、10MWS	主な教材 ①
27	バランス検査	・ バランスのパフォーマンステストを学ぶ ・ BBS、FR、TUG、BesTest、10MWS・TCT／FACT	主な教材 ①
28	中枢神経障害患者の姿勢と動作	・ オリエンテーション ・ 姿勢・動作の特徴	主な教材 ①④
29	中枢神経障害患者の姿勢と動作	・ 動作観察の手順／寝返り ・ 模倣テスト／起き上がり	主な教材 ①④
30	中枢神経障害患者の姿勢と動作	・ 歩行／立ち上がり	主な教材 ①④

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	通年	形態	講義・演習	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	30	対象年次	2年次
科目名	運動療法Ⅰ				担当者	井波 敬三		
	☐ 実務経験のある教員による授業							
使用教材	教員作成の資料・プリント							
科目概要	運動器系の生理や解剖などの基礎的原理と基本的な運動療法（関節可動域運動、筋力増強運動）との関係を理解する。運動の発現と調節ならびに遂行に必要な神経系・呼吸器系・循環器系・代謝機能とそれらの運動時の応答について理解する。様々な病態・疾患メカニズムに関する知識の拡充・整理を図り、医学的・臨床運動学的に適切な運動療法を施行する能力の基盤を養う。 理学療法士としての臨床実務経験を活かし、各種運動療法手技について手順や注意点等を解説し、その手順に従って正しい技能を施行・習得する訓練を行う。運動療法施行の前提となる機能評価やリスク管理においても、症例提示などを取り入れつつ実践的理解を促す。							
到達目標	1. 運動器系の構造、疾患の病態生理と修復過程の理解 2. 運動器系の基本的運動療法の理解と実践による技術の習得 3. 呼吸・循環・代謝の結びつきを知り、安全で有効な運動療法の概要を理解 4. 中枢神経系の解剖・機能、姿勢・運動制御について知識整理し、主として脳卒中片麻痺の運動療法の概要を理解 5. 運動学習理論や運動学的分析に基づく動作能力改善アプローチの概要を理解							
評価方法 基準	前・後期とも、中間・期末試験を行う。 成績は原則として筆記試験の得点に基づいて評点をつける。 実技面においては、授業中に教員が到達度を確認する機会を設ける。 年間を通じて総合的に60点以上得点したものに単位を認定する。							
成績評価の フィードバック	試験の採点后、答案は返却しない。また、担任を通して成績を公表する。 不合格者については学籍番号のみを掲示する。							
事前準備	☐ なし ☐ あり 1年次の解剖学・自然科学などの復習、2年次の生理学・内科学・評価学など他の授業、教科書との相互参照に努めること。							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	総論	運動療法とは何か	
2	関節可動性と運動療法 1	関節の可動性、関節包内運動 拘縮のメカニズム	
3	関節可動性と運動療法 2	関節可動域運動 1（上肢帯）	実技含む
4	関節可動性と運動療法 3	関節可動域運動 2（下肢帯、体幹）	実技含む
5	関節可動性と運動療法 4	関節モビライゼーション	実技含む
6	関節可動性と運動療法 5	筋の構造と機能、筋収縮様式	実技含む
7	関節可動性と運動療法 6	ストレッチング 関節可動域運動再び	実技含む
8	中間試験	第1回～第7回範囲	
9	筋と筋力、筋持久力	筋力増強の理論と運動療法	
10	筋と筋力、筋持久力	筋力・筋持久力低下に対する運動療法の実際	実技含む
11	末梢神経機能と運動療法 1	運動における末梢神経機能 末梢神経機能の低下	
12	末梢神経機能と運動療法 2	末梢神経障害に対する運動療法	実技含む
13	呼吸機能と運動療法 1	外呼吸と内呼吸、換気とガス交換	
14	呼吸機能と運動療法 2	換気と呼吸筋、呼吸中枢、運動時の呼吸応答	
15	前期のまとめ	講義9～14の振り返り（予備） 関節可動域運動三たび	実技含む

回	単元	内容	備考
16	呼吸機能と運動療法 3	肺機能検査、肺気量分画、フローボリュームカーブ、COPD、IP（間質性肺炎）	
17	呼吸機能と運動療法 4	呼吸障害に対する運動療法の実際	実技含む
18	循環機能と運動療法 1	運動における循環機能の役割 循環機能の低下、疾患と病態	
19	循環機能と運動療法 2	循環障害に対する運動療法の実際	
20	代謝機能と運動療法 1	代謝障害を考えるための基本的知識 運動とエネルギー、ATP産生	
21	代謝機能と運動療法 2	運動・身体機能における代謝機能の役割 代謝機能の低下、METs	
22	代謝機能と運動療法 3	糖尿病の運動療法	
23	中間試験	第16回～第22回範囲	
24	脳卒中片麻痺の運動療法 1	脳卒中の病態と臨床像	
25	脳卒中片麻痺の運動療法 2	脳卒中急性期の運動療法	実技含む
26	脳卒中片麻痺の運動療法 3	脳卒中回復期の運動療法 運動失調に対する運動療法	実技含む
27	運動制御と運動学習 1	運動制御の諸理論、システム論	
28	運動制御と運動学習 2	運動学習とフィードバック 運動プログラム構成	
29	基本動作と運動療法 1	背臥位・寝返り・起き上がり動作障害に対する運動療法	実技含む
30	基本動作と運動療法 2	座位・立ち上がり動作障害に対する運動療法 関節可動域運動四たび	実技含む

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	通年	形態	講義・演習	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	60	対象年次	3
科目名	運動療法Ⅱ ☐ 実務経験のある教員による授業				担当者	黒岩平、横山雅人		
使用教材	Cross link 運動器障害 理学療法学（メディカルビュー社）/ 配布資料等							
科目概要	本講義は、多岐に渡る疾患について、具体的な病態や術式を挙げていきながら、その治療過程を学習すると共に、その臨床推論や運動療法プログラムの立案と実施まで行えるようになる。 理学療法士での実務経験を活かし、整形外科疾患や脳血管疾患を中心に病態や治療について解説し、手順や注意点等を解説し、その手順により正しい技能を習得する訓練を行う。							
到達目標	1. 整形外科疾患、脳血管疾患を中心に病態と治療予後を理解し、説明することが出来る。 2. 各疾患に対する治療プログラムを立案することが出来る。 3. 立案したプログラムを、学生同士で実際に実施することが出来る。 4. グループ発表や質疑応答にて主体的な学習に繋げることができる。							
評価方法 基準	前期は筆記試験で判断する。 後期はグループ発表（発表内容や質疑応答による参加）と筆記試験の結果から総合的に判断する。 総合点数で60点以上になった者には単位を認定する。 評価基準に関しては学科の規定による。							
成績評価の フィードバック	試験採点后、点数と内容を個別説明する。 不合格者に関しては、学籍番号のみを掲示。							
事前準備	☐ なし ☒ あり 運動器分野の理学療法を中心に行うので、 整形外科の復習を行い病態を整理しておくこと。							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	概要	オリエンテーション 運動器障害理学療法の考え方	
2	骨折と脱臼に対する 運動療法①	上肢骨折に対する病態を理解し、機能障害に 対する運動療法を学ぶ	
3	骨折と脱臼に対する 運動療法②	大腿骨骨折に対する病態を理解し、機能障害 に対する運動療法を学ぶ	
4	骨折と脱臼に対する 運動療法③	下腿骨骨折に対する病態を理解し、機能障害 に対する運動療法を学ぶ	
5	変形性関節症に対する 運動療法①	変形性股関節症の病態を理解し、手術療法や 運動療法を学ぶ	
6	変形性関節症に対する 運動療法②	変形性膝関節症の病態を理解し、手術療法や 運動療法を学ぶ	
7	肩関節疾患に対する 運動療法①	肩関節周囲炎の病態を理解し、機能障害に対 する運動療法を学ぶ	
8	肩関節疾患に対する 運動療法②	肩腱板断裂の病態を理解し、機能障害に対す る運動療法を学ぶ	
9	腰部・脊椎疾患に対する 運動療法①	特異的・非特異的腰痛に対する特徴を理解 し、機能障害に対する運動療法を学ぶ	
10	腰部・脊椎疾患に対する 運動療法②	脊椎圧迫骨折の病態と保存療法について学ぶ	
11	脳血管障害に対する 運動療法①	脳血管障害に対する運動療法の基本 グループリフレクシオン（振り返り）	
12	脳血管障害に対する 運動療法②	寝返り・起き上がり グループリフレクシオン（振り返り）	
13	脳血管障害に対する 運動療法③	座位・立ち上がり グループリフレクシオン（振り返り）	
14	脳血管障害に対する 運動療法④	歩行・装具療法 グループリフレクシオン（振り返り）	
15	脳血管障害に対する 運動療法⑤	歩行・装具療法 グループリフレクシオン（振り返り）	

回	単元	内容	備考
16	脳血管障害に対する運動療法⑥	脳血管障害に対する運動療法の基本 グループリフレクション（振り返り）	
17	脳血管障害に対する運動療法⑦	脳血管障害に対する運動療法の基本 グループリフレクション（振り返り）	
18	脳血管障害に対する運動療法⑧	脳血管障害に対する運動療法の基本 グループリフレクション（振り返り）	
19	グループ検討①	授業オリエンテーション、グループ編成 症例提示、症例の理解・情報の整理	
20	グループ検討②	症例情報の整理／統合と解釈、スライド作成	
21	グループ検討③	症例情報の整理／統合と解釈、スライド作成	
22	グループ検討④	統合と解釈、考察、スライド作成	
23	グループ検討⑤	統合と解釈、考察、スライド作成	
24	グループ検討⑥	統合と解釈、考察、スライド作成	
25	グループ検討⑦	統合と解釈、考察、スライド作成	
26	グループ検討⑧	考察、発表練習、スライド作成 症例発表順番の決定	
27	グループ検討⑨	考察、発表練習、スライド作成 症例発表順番の決定	
28	症例発表会①	症例発表	
29	症例発表会②	症例発表	
30	症例発表会③	症例発表	

履修区分	必修	単位数	1	開講時期	後期	形態	講義	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	30	対象年次	2
科目名	物理療法 ☐ 実務経験のある教員による授業				担当者	小金澤 清文		
使用教材	最新理学療法学講座 物理療法学							
科目概要	物理療法は運動療法とともに主要な治療手技の一つである。本講義では、種々の物理療法について基礎的な原理・方法を学び、実際に物理療法を施行できるようにする。 また、国家試験に対応できる学力を身につける。 理学療法士の実務経験を活かし、温熱療法や電磁波療法など個々の治療法の生理学的効果や実施方法などについて解説し、国家試験および理学療法における必要な知識を講義する。							
到達目標	1. 物理療法の定義、目的について述べられる。 2. 各種物理療法の生理学的作用が説明できる。 3. 適応と禁忌について理解できる。 4. 用いられる機器について説明及び施行できる。							
評価方法 基準	中間試験、期末試験、出席状況、授業態度、小テスト等を総合的に判断し、60点以上得点した者に単位を認定する。評価基準については学科の規定による。							
成績評価の フィードバック	期末試験の採点后、総合的な得点を各学生に知らせる。不合格者については、学籍番号のみを掲示する。							
事前準備	☐ なし □ あり							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	物理療法総論	物理療法の定義、分類、関連法規・法則	
2	温熱療法 1	温熱療法の定義、生理学的効果	
3	温熱療法 2	伝導熱治療	
4	温熱療法 3	放射熱治療、温熱療法の実際	
5	寒冷療法 1	寒冷療法の概要	
6	寒冷療法 2	寒冷療法の実際とリスク	
7	電磁波療法 1	電磁波療法の概要、生理学的効果	
8	温熱療法と寒冷療法	温熱療法と寒冷療法のまとめ	
9	電磁波療法 2	超短波療法、極超短波療法	
10	超音波療法 1	超音波療法の概要、治療原理	
11	超音波療法 2	超音波療法の生理学的効果	
12	超音波療法 3	超音波療法の臨床	
13	電気刺激療法 1	電気刺激療法の概要、治療原理	
14	電気刺激療法 2	電気刺激療法の臨床	
15	電気刺激療法 3	経皮的末梢神経電気刺激法	

履修区分	必修	単位数	1	開講時期	前期	形態	講義	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	30	対象年次	3
科目名	物理療法 ☐ 実務経験のある教員による授業				担当者	小金澤 清文		
使用教材	最新理学療法学講座 物理療法学							
科目概要	物理療法は運動療法とともに主要な治療手技の一つである。本講義では、種々の物理療法について基礎的な原理・方法を学び、実際に物理療法を施行できるようにする。 また、国家試験に対応できる学力を身につける。 理学療法士の実務経験を活かし、温熱療法や電磁波療法など個々の治療法の生理学的効果や実施方法などについて解説し、国家試験および理学療法における必要な知識を講義する。							
到達目標	1. 物理療法の定義、目的について述べられる。 2. 各種物理療法の生理学的作用が説明できる。 3. 適応と禁忌について理解できる。 4. 用いられる機器について説明及び施行できる。							
評価方法 基準	中間試験、期末試験、出席状況、授業態度、小テスト等を総合的に判断し、60点以上得点した者に単位を認定する。評価基準については学科の規定による。							
成績評価の フィードバック	期末試験の採点后、総合的な得点を各学生に知らせる。不合格者については、学籍番号のみを掲示する。							
事前準備	☐ なし □ あり							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	電気刺激療法 1	機能的電気刺激療法	
2	電気刺激療法 2	神経筋電気刺激、運動神経伝導速度	
3	電気刺激療法 3	干渉電流療法、微弱電流刺激	
4	電気刺激療法 4	強さ-時間曲線	
5	光線療法 1	光線療法の概要、治療原理	
6	光線療法 2	紫外線療法、低反応レベルレーザー療法	
7	牽引療法 1	牽引療法の概要、治療原理	
8	電気刺激療法と光線療法	電気刺激療法と光線療法のまとめ	
9	牽引療法 2	頸椎牽引、腰椎牽引	
10	水治療法 1	水治療法の治療原理、生理学的効果	
11	水治療法 2	水治療法の実際	
12	物理療法の臨床応用 1	EMGバイオフィードバック療法	
13	物理療法の臨床応用 2	持続的他動運動訓練	
14	物理療法の臨床応用 3	症例別物理療法プログラム 1	
15	物理療法の臨床応用 4	症例別物理療法プログラム 2	

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	通年	形態	講義・演習	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	60	対象年次	2
科目名	日常生活活動学 ☐ 実務経験のある教員による授業				担当者	横山大輝		
使用教材	メディカルビュー 理学療法学テキスト 日常生活活動学							
科目概要	理学療法の主たる目的は対象者の日常生活活動（ADL）の遂行能力を高めること、と言っても過言ではありません。ADLとは、私たちが生活するために必要な能力を指します。対象者がADLのどの場面で困難にさらされているかを評価し、理学療法的な視点からアプローチする必要があります。本講義を通じて対象者の状態に合わせた動作指導や環境設定、ならびにアプローチ全般につながるよう概念を学習します。 理学療法の実務経験を活かし、ADLについてその手順や注意点を解説し、その手順により正しい技能を習得する訓練を行う。							
到達目標	①ADL、QOL、ICFの概念が理解できる ②ADLの評価の考え方が理解でき、実際に行うことができる ③補装具の考え方、活用法を理解できる ④基本動作とセルフケアにおける分析、動作の工夫への応用ができる ⑤住環境整備についての考え方、活用法を理解できる ⑥疾患別ADLの考え方と実際について理解できる							
評価方法 基準	単元ごとの小テスト並びに、中間・期末テストの点数から総合的に評価する。							
成績評価の フィードバック	各単元ごとの小テストの返却及び解説の実施。 本試験採点后、点数と内容を個別説明する。不合格者に関しては、学籍番号のみを掲示。							
事前準備	☐ なし ☒ あり 適宜予習内容を示す							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	総論①	ADLの歴史とADLの概念と範囲	
2	総論②	ICD,ICIDH,ICFのつながりとICF概念,ICF分類	
3	評価①	日常生活活動評価の目的と方法	
4	評価②	代表的な評価指標	
5	移動補助具・車椅子	ADL支援機器の種類と適応	
6	基本動作①	起居動作・移乗	
7	基本動作②	起居動作・移乗・移動・歩行	
8	まとめ	授業のまとめ	
9	セルフケア①	食事動作・更衣動作	
10	セルフケア②	トイレ動作・入浴動作	
11	日常生活用具・自助具	ADL支援機器の種類と適応	
12	住環境整備	住環境整備の意義を理解し手法を学習する	
13	脳血管疾患①	疾患特性から障害像を予測しADL指導を行う	
14	脳血管疾患②	疾患特性から障害像を予測しADL指導を行う	
15	前期総復習	前期で学習した内容の復習を行う	

回	単元	内容	備考
16	脊椎・脊髄疾患①	疾患特性から障害像を予測しADL指導を行う	
17	脊椎・脊髄疾患②	疾患特性から障害像を予測しADL指導を行う	
18	関節リウマチ①	疾患特性から障害像を予測しADL指導を行う	
19	関節リウマチ②	疾患特性から障害像を予測しADL指導を行う	
20	変形性関節症	疾患特性から障害像を予測しADL指導を行う	
21	脳性麻痺	疾患特性から障害像を予測しADL指導を行う	
22	呼吸器疾患	疾患特性から障害像を予測しADL指導を行う	
23	神経筋疾患①	疾患特性から障害像を予測しADL指導を行う	
24	まとめ	授業のまとめ	
25	高次脳機能障害・認知症	疾患特性から障害像を予測しADL指導を行う	
26	症例検討①	模擬症例から問題点を予測しADL評価・実践方法を学習する	
27	症例検討②	模擬症例から問題点を予測しADL評価・実践方法を学習する	
28	症例検討③	模擬症例から問題点を予測しADL評価・実践方法を学習する	
29	症例検討④	模擬症例から問題点を予測しADL評価・実践方法を学習する	
30	後期総復習	前期で学習した内容の復習を行う	

履修区分	必修	単位数	4	開講時期	通年	形態	講義	
開講学科	理学療法学科				配当時間	60	対象年次	2年次
科目名	義肢・装具学				担当者	根上 雅臣		
	実務経験のある教員による授業							
使用教材	教科書、プリント、実物、動画など							
科目概要	理学療法士として必要な義肢装具の理論および実際について臨床経験のある教員が講義する。これまで学んだ解剖学、運動学などを基盤とし更にバイオメカニクス理論を取り入れながら理学療法専門科目である義肢装具について理解を深める。義肢装具の種類と目的、各装具の機能、および各種疾患に対する装具の適応について学習する。 総合病院や施設での実務経験を活かし、義肢・装具の種類・特徴及び調整について解説する。							
到達目標	1) 断端管理（ソフトドレッシング）の基本ができる。 2) 義肢装具の名称、機能を説明できる 3) 疾患、障がいに応じて適切な義肢装具を選択できる 4) チェックアウトができる 5) 簡単なアライメント調整ができる 6) 医師、義肢装具士、作業療法士と連携し適切なサービス提供するための基礎を習得							
評価方法 基準	前期・後期それぞれの定期テスト 実技テスト 小テストの結果							
成績評価の フィードバック	テストが不可の場合、再試験、レポート提出							
事前準備	☐ なし ☒ あり 解剖学、運動学、整形外科、中枢神経疾患について復習すること							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	義肢学 1	切断総論	
2	義肢学2	断端管理	
3	義肢学3	ソフトドレッシング実技1	
4	義肢学4	義肢総論	
5	義肢学 5	下腿義足総論	
6	義肢学6	下腿義足の種類	
7	義肢学7	下腿義足アライメント	
8	中間試験	中間試験	
9	義肢学9	大腿義足総論	
10	義肢学10	大腿義足の種類	
11	義肢学11	大腿義足のパーツ	
12	義肢学12	大腿義足アライメント	
13	義肢学13	大腿義足ダイナミックアライメント	
14	義肢学14	股義足、膝義足、サイム義足など	
15	義肢学15	復習、まとめ、小テスト	

回	単元	内容	備考
16	装具学1	装具総論	
17	装具学2	装具のパーツ	
18	装具学3	脳卒中片麻痺の装具1	
19	装具学4	脳卒中片麻痺の装具2	
20	装具学5	脳卒中片麻痺の装具3	
21	装具学6	整形外科の装具1	
22	装具学7	整形外科の装具2	
23	装具学8	整形外科の装具3	
24	装具学9	対麻痺の下肢装具	
25	装具学10	小児装具1	
26	装具学11	小児装具2	
27	装具学12	体幹装具1	
28	装具学13	体幹装具2	
29	装具学14	上肢装具	
30	装具学15	まとめ、復習、小テスト	

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	通年	形態	講義・演習	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	45	対象年次	3
科目名	技術論Ⅰ ☐ 実務経験のある教員による授業				担当者	大塚 智文 横山 大輝		
使用教材	大塚担当：なし（講義ごとにプリント配布） 横山担当：頸髄損傷のリハビリテーション、配布資料							
科目概要	大塚担当：運動器疾患に対する知識並びに理学療法の基礎知識を基に、運動器の各種疾患について評価から治療までの流れ、統合と解釈、注意点、技術を講義と実技を交えて行っていく。 横山担当：脊髄損傷患者について、近年では高齢化に伴う患者も増加傾向であり、身体機能面での向上以外に精神面でのサポート、福祉機器の選択など、より患者に寄り添った理学療法が必要となる。本講義の一部でチーム基盤型学習を用い実施する。 理学療法士の実務経験を活かし、運動器疾患の病態・回復過程を正しく理解し、臨床現場で実践できる技能の習得を図る。							
到達目標	1. 運動器疾患における知識を理解できる 2. 運動器疾患における理学療法的評価方法を理解し、実施できる 3. 運動器疾患における理学療法プログラムを理解し、実施できる 4. 運動器疾患におけるリハビリテーション的生活指導ができる 5. 運動器疾患における理論・技術を理解し、教員（講師）の指導の下行える							
評価方法 基準	大塚担当：筆記試験と実技試験にて行う。 横山担当：前期の成績割合は期末試験の成績が7割、TBLの成績が3割とする。							
成績評価の フィードバック	筆記試験、実技試験終了後に個人指導を行う。							
事前準備	☐ なし ☒ あり ・授業で学んだ知識や技術を身に着けるための反復練習が必須です。							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	イントロダクション	授業の概要、運動器疾患に対する概念	担当：大塚
2	臨床推論	症例検討から臨床推論の意義と目的を理解する	担当：大塚
3	動作分析	運動連鎖から動作を分析し、機能障害の原因を探る	担当：大塚
4	触診	触診から機能障害の原因を探る	担当：大塚
5	症例検討（１）	腰椎疾患の評価と治療（１）	担当：大塚
6	症例検討（２）	腰椎疾患の評価と治療（２）	担当：大塚
7	症例検討（３）	変形性股関節症の評価と治療（１）	担当：大塚
8	症例検討（４）	変形性股関節症の評価と治療（２）	担当：大塚
9	イントロダクション、疫学	脊髄解剖の復習、疫学	担当：横山
10	病態	病態を学習する	担当：横山
11	評価法	ASIA, Zancoliなどの評価法を学習する	担当：横山
12	日常生活動作	日常生活動作について学習する	担当：横山
13	合併症①(TBL)	合併症について学習する①	担当：横山
14	合併症②(TBL)	合併症について学習する②	担当：横山
15	理学療法①(TBL)	治療法について学習する①	担当：横山

回	単元	内容	備考
16	理学療法②(TBL)	治療法について学習する②	担当：横山
17	筆記試験		
18	症例検討（５）	変形性膝関節症の評価と治療（１）	担当：大塚
19	症例検討（６）	変形性膝関節症の評価と治療（２）	担当：大塚
20	症例検討（７）	変形性膝関節症の評価と治療（３）	担当：大塚
21	症例検討（８）	足関節疾患の評価と治療（１）	担当：大塚
22	症例検討（９）	足関節疾患の評価と治療（２）	担当：大塚
23	症例検討（１０）	肩関節疾患の評価と治療（１）	担当：大塚
24	症例検討（１１）	肩関節疾患の評価と治療（２）	担当：大塚
25	筆記試験		
26			
27			
28			
29			
30			

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	通年	形態	講義・演習	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	45	対象年次	3
科目名	技術論Ⅱ 実務経験のある教員による授業				担当者	横山 雅人		
使用教材	・15レクチャー神経障害理学療法Ⅰ・Ⅱ,中山書店・実践！理学療法評価学,医歯薬出版・病気が見える脳と神経第2版,メ ディックメディア・脳卒中の機能障害SIASとFIM・臨床運動学,中山書店・基礎から学ぶ画像の診方第3版,医歯薬出版・ リハビリテーションビジュアルブック,学研							
科目概要	脳血管障害、パーキンソン病、脊髄小脳変性症を中心とした神経障害を呈する疾患 に対し、理学療法の一般的評価、評価結果を踏まえた統合と解釈、問題点抽出、ゴール 設定、プログラム立案、理学療法の具体的施行、リスク管理を学ぶ 病院勤務での実務経験を活かし、片麻痺などの運動機能障害、すくみ足などのパーキ ンソン病特有の運動障害、運動失調などの小脳障害に対する実践的な理学療法技術の 習得を図る。							
到達目標	1．神経障害における基本的知識を理解できる。 2．神経障害における一連の理学療法検査測定が実施できる。 3．神経障害における理学療法のリスク管理ができる。 4．神経障害における統合と解釈ができる。 5．神経障害における理学療法プログラムの立案・実施ができる。							
評価方法 基準	実技テスト・小テスト前期（中間と期末）及び後期末の試験から総合的に判断する。また、受講態度・ 参加・貢献なども考慮する。総合的に6割以上の者に単位を認定する。試験の再試験対象者は、下記の割合 で算出され結果において6割未満の者とする。 【試験70%、課題・実技30%】 ※課題・実技の内容により配分が変更する場合がある／中間試験は100%で換算							
成績評価の フィード バック	科目評価結果、試験得点については希望者に知らせる。 （問題・答案は基本的に非公開） 不合格者については、学籍番号のみを掲示する。							
事前準備	☐ なし ☒ あり ・神経障害に関する解剖学や生理学などを再学習しておくことを望む。 ・実技の際は運動できる格好で授業の望むこと（ジャージ）。 ・教員の提示するルールを守り、指示に従うこと。 ※授業進度によって授業計画が変更する場合、補講を実施する							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	授業ガイダンス 神経障害理学療法総論	シラバスの説明／中枢神経障害の基礎知識	
2	脳の構造と機能 ー運動	必要な基礎知識 脳の可塑性	
3	脳の構造と機能 ー感覚・血管・灌流領域	脳の機能と構造 脳血管灌流分布	
4	脳血管障害の基礎知識 中枢性運動障害	基本的病態と治療：予後予測 回復過程とメカニズム／機能障害	
5	脳血管障害の基礎知識 中枢性運動障害	基本的病態と治療：予後予測 回復過程とメカニズム／機能障害	
6	脳血管障害に対する評価-意義・目的・方法	評価の意義・目的：片麻痺機能検査・筋緊張検査・協調性検査・姿勢バランス検査	
7	脳血管障害に対する評価-意義・目的・方法	SIAS・高次脳機能障害・ADL評価	
8	脳血管障害に対する理学療法 -急性期・回復期・生活期	急性期：検査測定・理学療法の考え方・リスク管理・具体的介入方法・画像所見	
9	脳血管障害に対する理学療法 -急性期・回復期・生活期	急性期：検査測定・理学療法の考え方・リスク管理・具体的介入方法・画像所見	
10	脳血管障害に対する理学療法 -急性期・回復期・生活期	急性期：検査測定・理学療法の考え方・リスク管理・具体的介入方法・画像所見	
11	パーキンソン病に対する 理学療法	病態・リスク管理・検査測定・考え方	
12	脊髄小脳変性症に対する 理学療法	病態・リスク管理・検査測定・考え方	
13	理学療法 臨床思考過程	思考過程・臨床推論・STEP 1～STEP 2 問診・検査測定項目の検討／結果の解釈	
14	理学療法 臨床思考過程	思考過程・臨床推論・STEP 1～STEP 2 問診・検査測定項目の検討／結果の解釈	
15	理学療法 臨床思考過程	STEP 3・4・5：統合と解釈 情報の統合（整理）ICFに分類	

回	単元	内容	備考
16	理学療法 臨床思考過程	STEP 3・4・5：統合と解釈 全体像を捉える／関連図	
17	臨床思考過程 統合と解釈	STEP 3・4・5：統合と解釈 全体像を捉える／関連図／文章化	
18	臨床思考過程 統合と解釈	ケースからの統合と解釈の実施 STEP 6～9／問題点抽出～プログラム立案	
19	臨床思考過程 統合と解釈	ケースからの統合と解釈の実施 STEP 6～9／問題点抽出～プログラム立案	
20	ケーススタディ	グループケーススタディ 症例報告書：レジュメ作成	
21	ケーススタディ	グループケーススタディ 症例報告書：レジュメ作成	
22	ケーススタディ	グループケーススタディ 症例報告書：レジュメ作成	
23	ケーススタディ	治療プログラム発表	
24	ケーススタディ	治療プログラム発表	予備日

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	通年	形態	講義	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	45	対象年次	3
科目名	技術論Ⅲ □ 実務経験のある教員による授業				担当者	小野 浩		
使用教材	理学療法学講座 内部障害理学療法学(医歯薬出版)							
科目概要	呼吸器疾患においては、慢性閉塞性肺疾患を中心に呼吸介助手技や体位排痰法について学び、評価から治療までの流れを習得する。 循環器疾患においては、狭心症・心筋梗塞を中心に評価から治療までの流れを習得する。 その他、糖尿病のリハビリテーションについても学んでいく。 理学療法士の実務経験を活かし、呼吸器疾患や循環器疾患など内部障害の病態や評価、治療などについて講義し、国家試験および臨床現場で必要な知識・技能の習得を図る。							
到達目標	1．内部障害における知識を理解できる。 2．内部障害における理学療法的評価方法を理解できる。 3．内部障害における理学療法プログラムを理解できる。 4．内部障害におけるリハビリテーション的生活指導ができる。 5．心電図上の不整脈を見つけ、説明できる。							
評価方法 基準	前期及び後期末に筆記試験を行う。また、受講態度なども考慮し試験の得点に加える。 総合的に60点以上得点した者に単位を認定する。 評価基準については学科の規定による。							
成績評価の フィードバック	試験の採点后、得点を各学生に知らせる。 不合格者については、学籍番号のみを掲示する。							
事前準備	□ なし □ あり 呼吸器や循環器など内部障害に関する解剖学や生理学について再学習しておくことを望む。							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	内部障害理学療法学総論	内部障害の定義 内部障害の認定	
2	呼吸器の構造と 呼吸調節機能	呼吸器の構造 呼吸調節機能のメカニズム	
3	呼吸器機能評価の 意義と方法 1	スパイログラム（肺気量分画） 換気障害の判定	
4	呼吸器機能評価の 意義と方法 2	フローボリューム曲線 視診、触診、聴診、打診	
5	呼吸機能検査	運動負荷試験 血液ガスと呼吸機能	
6	慢性閉塞性肺疾患 1	COPDの病態 COPDの理学療法評価	
7	慢性閉塞性肺疾患 2	全身持久力・筋力トレーニング ADLトレーニング	
8	気管支喘息、肺気腫まとめ	特徴と治療法 理学療法	
9	排痰法	体位排痰法 ハフティング、咳嗽	
10	胸郭可動域練習	徒手胸郭伸張法、シルベスター法	
11	代謝障害	肥満度の判定 肥満と高血圧・脂質異常症の関係	
12	エネルギー消費量	身体活動の強さを表すMET s 身体活動の量を表すMET s・時	
13	糖尿病の治療と運動療法	糖尿病の種類、症状、指標 糖尿病の治療	
14	心臓リハビリテーション の概要	心臓リハビリテーションの定義と目的 構成要素と効果	
15	虚血性心疾患の理学療法	狭心症と心筋梗塞 虚血性心疾患の治療と理学療法	

回	単元	内容	備考
16	代謝性疾患、虚血性心疾患 のまとめ	代謝性疾患、虚血性心疾患について整理し、 理解を深める	
17	心不全の理学療法	心不全の病態、分類と症状 心不全の運動療法	
18	閉塞性動脈硬化症の 理学療法	症状と重症度分類 治療法と理学療法	
19	不整脈と心電図の診かた	心電図の基本波形 頻脈・徐脈、期外収縮、心房細動など	
20	不整脈と心電図の診かた	房室ブロック 虚血・梗塞、不整脈の問題点	
21	運動処方 1	運動負荷試験の目的 運動負荷試験の中止基準	
22	運動処方 2	運動処方の作成 6 分間歩行試験、Borgスケール	
23	再発予防とチーム医療	動脈硬化の危険因子 心不全の再発予防	

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	前期	形態	実技	
開講学科	理学療法学科（昼間課程）				配当時間	45	対象年次	3
科目名	技術論Ⅳ（PNF,キネステティック） □ 実務経験のある教員による授業				担当者	井波 敬三		
使用教材	教科書なし（講義スライド抜粋資料、実技要点資料等、適宜配布する）							
科目概要	脳卒中・脊髄損傷など中枢神経系疾患に起因する運動麻痺や動作能力障害を改善するには、単純な他動的関節運動では不十分である。また加齢や疾病、長期臥床等によって自力での体位変換が難しい対象者においても、全身の協調的・連鎖的運動を促すことが必要となる。この授業では、とくに”回旋運動”を重視しながら療法士自身が対象者と共にダイナミックに動くことで、三次元的で協調的な身体運動を再構築していく臨床的技術を複数紹介する。それらの実技練習を通して「ヒトの自然な動き」について専門的理解を深めてほしい。 理学療法士としての実務経験を活かし、また米国での臨床業務を含むPNFプログラム参加経験、キネステティックアドバイザー・インストラクターコース受講経験に基づき、療法士自身の身体の使い方や手の触れ方などが対象者との共同作業の成否を左右することを伝えたい。							
到達目標	1．”対角線・回旋”および”抵抗運動”をキーワードとする「PNF」（固有受容性神経筋促通法）の基本理念と施行上の原則を、実技を通して理解する。 2．「キネステティック」（感覚と制御、コミュニケーションを重視した運動学習論）に基づく体位変換実技を通して、自立を支援する技術の要点を理解する。 3．上記1、2から「ヒトの自然な動き」に関する専門的理解・視点を得る。							
評価方法 基準	中間試験、期末試験（いずれも筆記試験）を実施する。 技術論Ⅳ（レッドコード）試験得点との平均を、科目の評点とする。							
成績評価の フィードバック	筆記試験採点后、答案閲覧の希望や採点についての質問があれば応じる。 不合格者については学籍番号のみ掲示する。							
事前準備	□ なし □ あり 実技中心の授業であるが、個々の実技を表面的にまねたり、それらが上手にできることを目指しているのではない（そもそも、どれをとっても短時間でマスターできる簡単な技術ではない）。それらに共通する＜原理・原則＞について、身体で気づくための作業であるということを念頭に履修して下さい。実技は毎行なうので、ふさわしい服装で参加すること。							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	ヒトの自然な動きとは PNF①	ディスカッション：ヒトの自然な動き 講義：PNFの概要（固有受容感覚） 実技：上肢パターン	
2	PNF②	講義：対角線＋回旋 実技：肩甲帯パターン、上肢パターン	
3	PNF③	講義：ベーシック・プリンシプル 実技：骨盤帯パターン、下肢パターン	
4	PNF④	講義：適切な抵抗、PNFフィロソフィー 実技：ダイナミックリバーサル、放散	
5	PNF⑤	講義：遠心性収縮の重要性 実技：異なる等張性収縮の組み合わせ運動	
6	PNF⑥	講義：体幹の安定性 実技：体幹のパターン、スタビリゼーション	
7	PNF⑦	講義：腱紡錘、I b抑制、等尺性収縮後弛緩 実技：ホールド・リラックス	
8	中間試験	試験範囲PNF①～⑦	
9	キネステティック①	講義：荷重と抜重、支持面 実技：立ち上がり、坐位前後移動、上方移動	
10	キネステティック②	講義：円の動き（縦の動きと横の動き） 実技：側方移動、寝返り、起き上がり	
11	キネステティック③	講義：抵抗に気付いて反応する、「歩く」 実技：起き上がり、上方移動	
12	キネステティック④	講義：7つの基本体位 実技：腹臥位、床⇄ベッド・椅子、四つ這い	
13	キネステティック⑤	講義：車椅子⇄ベッド移乗の要点 実技：一緒に動く、持ち上げない移乗	
14	キネステティック⑥	講義：体位変換の準備、支持面への適応援助 実技：“ウォームアップ”と“クールダウン”	
15	キネステティック⑦ まとめ	講義とディスカッション：ヒトの自然な動き 実技：キネステティックの一連の体位変換	

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	前期	形態	講義・演習	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	45	対象年次	3
科目名	技術論Ⅳ（レッドコード） ☐ 実務経験のある教員による授業				担当者	大塚 智文		
使用教材	なし（授業ごとにプリント配布）							
科目概要	レッドコードを用いた治療方法について、理論、技術を講義・実習を通して学習する。 理学療法士の実務経験を活かし、レッドコードを用いた治療技術の正しい理論と技能を習得する訓練を行う。							
到達目標	1. レッドコードの使用方法を覚えて、道具を使えるようになる。 2. レッドコードを使うメリットについて理解する。 3. レッドコードを用いた治療プログラムを行うことができる。							
評価方法 基準	筆記試験、実技試験にて行う。							
成績評価の フィードバック	筆記試験、実技試験終了後に個人指導を行う。							
事前準備	☐ なし ☒ あり 理論や技術を身に着けるための反復練習が必要です。							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	イントロダクション	授業の概要、道具の取り扱い方	
2	道具の扱い方	腰部リラクゼーション	
3	レッドコードの特徴（1）	サスペンションポイント	
4	レッドコードの特徴（2）	開放運動連鎖、閉鎖運動連鎖	
5	レッドコードの特徴（3）	負荷量の調節について	
6	治療理論と実施方法（1）	感覚運動機能	
7	治療理論と実施方法（2）	体幹の支持性	
8	治療理論と実施方法（3）	運動制御エクササイズ	
9			
10			
11			
12			
13			
14			
15			

履修区分	必修	単位数	2	開講時期	通年	形態	講義・演習	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	45	対象年次	3
科目名	スポーツ傷害理学療法学 ☒ 実務経験のある教員による授業				担当者	黒岩 平 小野 浩		
使用教材	スポーツ外傷・傷害の理学診療・理学療法ガイド（その他個別に作成した資料）							
科目概要	本講義は、近年クローズアップされてきている健康志向や、各種スポーツ選手のケアに適応できるようになるため、スポーツを通してトレーニングの方法や、競技復帰までの一連の作業を学習すると共に、再発予防のための身体的メカニズムを知ること、健康維持としての側面で理学療法士がどのように介入していくことが望まれるのかを知ることが出来る。 理学療法士の実務経験を活かし、スポーツによる外傷や障害について講義し、臨床現場やスポーツ現場で必要とされる技能の習得を図る。							
到達目標	スポーツに関与する疾患の知識を深め、予防的観点とか治療的観点から、リハビリテーションプログラムの立案と実施が出来るようになる。							
評価方法 基準	前期・後期末に筆記試験を行う。また、通年時に1度実技試験を行い、筆記試験と総合的に判断する。 総合点数で60点以上になった者には単位を認定する。							
成績評価の フィードバック	試験採点后、点数と内容を個別説明する。不合格者に関しては、学籍番号のみを掲示。							
事前準備	☐ なし ☒ あり 整形外科的要素が強い為、整形外科で学んだところをもう一度整理しておく。							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	トレーニングの概要と方法	トレーニングの方法や条件、リスクなどを理解し、安全に運動が行えるようにする	
2	栄養と休息	身体機能を上げるために必要な要素である、休息や栄養の正しい取り方を理解する。	
3	女性アスリートとの関わり	女性アスリート特有の身体的・心理的特徴を、正しく理解する。	
4	靴とインソール	スポーツにおけるシューズやインソールの重要性を理解し、変化を体感・実践する	
5	競技別特性①	様々な競技における障害・外傷、トレーニング内容を理解する	
6	競技別特性②	様々な競技における障害・外傷、トレーニング内容を理解する	
7	症例検討	これまでの学習を基に症例に対する理学療法介入計画を思考し、作成する	
8	総まとめ	前期授業のめとめを行う	
9	総論 スポーツ傷害とは	スポーツ外傷と傷害の違いや、その成り立ちについて学習する	
10	各疾患に対する理学療法	スポーツ時に好発する体幹・腰部疾病に関しての詳細を、正しく理解する	
11	各疾患に対する理学療法	スポーツ時に好発する股関節・大腿部疾病に関しての詳細を、正しく理解する	
12	各疾患に対する理学療法	スポーツ時に好発する膝関節関連疾病に関しての詳細を、正しく理解する	
13	各疾患に対する理学療法	スポーツ時に好発する膝関節関連疾病に関しての詳細を、正しく理解する	
14	各疾患に対する理学療法	スポーツ時に好発する足関節・足部疾病に関しての詳細を、正しく理解する	
15	テーピング	スポーツ外傷や障害に対するテーピングを学び実践する	

回	単元	内容	備考
16	各疾患に対する理学療法	スポーツ時に好発する肩関節・肩甲帯疾病に関しての詳細を、正しく理解する	
17	各疾患に対する理学療法	スポーツ時に好発する肩関節・肩甲帯疾病に関しての詳細を、正しく理解する	
18	各疾患に対する理学療法	スポーツ時に好発する肘関節疾病に関しての詳細を、正しく理解する	
19	各疾患に対する理学療法	スポーツ時に好発する手関節・手指疾患に関しての詳細を、正しく理解する	
20	脳振盪、突然死	スポーツ時における脳振盪、突然死に関しての詳細を、正しく理解する	
21	スポーツ傷害の予防 動作のメカニズム	スポーツ傷害の予防に関して正しく理解する (ランニング等のメカニズムの理解)	
22	レポート作成	症例に対する問題点の抽出から治療プログラムの立案をレジメ作成する	
23	総まとめ	後期授業のまとめを行う	

履修区分	必修	単位数	3	開講時期	通年	形態	講義	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	45	対象年次	3
科目名	地域理学療法学 □ 実務経験のある教員による授業				担当者	小野 浩		
使用教材	地域理学療法学 第3版（医歯薬出版株式会社）,日常生活活動学・生活環境学第5版（医学書院）教員作成資料他							
科目概要	地域包括ケアシステムの推進に伴い、地域における理学療法の役割は大きくなっている。高齢化が進む中、多様な住まいのあり方が求められ、地域で人々が安全、安心に暮らせるように支援していく事が大切になってくる。本講義では時代背景も踏まえ、社会に求められる地域理学療法について学習していく。 理学療法士の実務経験を活かし、地域包括ケアシステムや在宅での関わりをはじめとする地域で活躍するための知識を講義し、国家試験や卒業後に必要な知識・技能の習得を図る。							
到達目標	①地域理学療法の定義について説明できる。 ②生活環境論の概論を理解できる。 ③地域理学療法における社会資源について概説できる。 ④地域包括ケアシステムにおける理学療法士の役割を概説できる。 ⑤福祉関連用具の種類と特徴を理解できる。							
評価方法 基準	授業態度や出席状況10点、課題発表10点、筆記試験80点の3項目合計で成績判定し、60点以上を合格とする。							
成績評価の フィードバック	小テスト採点後に解説を行う。期末試験不合格者については学籍番号のみ提示とする。							
事前準備	□ なし ☑ あり 使用教科書を事前に読み予習を行うのが望ましい。							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	オリエンテーション	地域リハビリテーションの概要	
2	地域理学療法について	病期別のリハビリテーションと地域理学療法	
3	在宅医療に関わる知識（呼吸）	在宅酸素療法について学習する	
4	在宅医療に関わる知識（栄養状態）	在宅における栄養状態、摂取方法について学習する	
5	在宅医療に関わる知識（褥瘡）	褥瘡発生機序を理解し、褥瘡予防について学習する	
6	健康状態の評価とリスク管理	特に注意すべきリスクについて学び、評価できるように学習する	
7	生活環境の概念	生活環境の概念と生活環境の重要性	
8	在宅医療における知識のまとめ	在宅医療に関する知識を確認し、在宅支援の重要性を学習する	
9	生活環境評価	生活環境評価の手順と方法	
10	生活環境の改善計画	生活環境評価に基づく改善計画	
11	各関連法規	社会保険制度や介護保険、障害者福祉について	
12	生活環境と法制度の関係	生活環境整備を行う上での各法制度の活用	
13	状況別生活環境の改善点①	状況に応じた環境整備の方法	
14	状況別生活環境の改善点②	異なる移動手段におけるスペース幅の検討や改善方法	
15	場所別生活環境の改善点	玄関や階段、トイレ、浴室の改善方法	

回	単元	内容	備考
16	高齢者と転倒	事故全体における転倒事故の割合、在宅での転倒についての理解	
17	高齢者の転倒予防	転倒予防と環境調整の理解	
18	高齢者の転倒要因と理学療法士の関わり	環境を踏まえた高齢者の転倒発生メカニズムと理学療法士の介入方法	
19	生活環境と転倒回避戦略	転倒回避戦略についての理解と高齢者の身体特性について知る	
20	福祉用具の選定	福祉用具の理解を深め、適切な介入を学ぶ	
21	図面の作成①	模擬症例に対して、図面の作成の実施	
22	図面の作成②	模擬症例に対し、図面を作成、発表	
23	図面の作成とリハビリテーション計画	図面の作成で得た症例の在宅復帰に向けた課題に対する治療計画を考える	

履修区分	必修	単位数	1	開講時期	後期	形態	実習	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	45	対象年次	2
科目名	見学実習				担当者	大塚 智文 他理学療法学科全教員		
	☐ 実務経験のある教員による授業							
使用教材	テキスト：理学療法評価法、日常生活活動など							
科目概要	臨床実習指導者のもと、実際の医療および福祉の現場を見学する。それまで学んできた知識を確認するとともに、実習指導者の理学療法士としての立ち振る舞いやコミュニケーションの取り方などから将来自分がなりたい理学療法士像をイメージする。また、理学療法士の業務内容や多職種との連携について理解を深める。さらに実際の対象者とコミュニケーションを図ることにより医療従事者となることに対し自覚を促す。 理学療法士の実務経験を活かし、学生が実習を通じて理学療法士の業務内容の実際や資質を確認することを支援し、医療・福祉に関わる専門職としてのあるべき知識・技能・態度を高める指導を行う。							
到達目標	・実習施設について説明できる ・実習についての正確な記録ができる ・実習で得た知識や経験を自己の成長に結びつける ・理学療法士の業務内容や役割について説明できる ・コミュニケーション能力を高める ・理学療法の過程、実施方法について理解を深める							
評価方法 基準	成績報告書、目標シート、実習行動記録、ポートフォリオの提出を義務付け、教員による審査を行う。また、実習報告の内容についても評価する。							
成績評価の フィードバック	成績報告書とポートフォリオをもとに教員によるフィードバックを行う。							
事前準備	☐ なし ☒ あり							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	見学実習 1	実習施設における実習 1日目	
2	見学実習 2	実習施設における実習 2日目	
3	見学実習 3	実習施設における実習 3日目	
4	見学実習 4	実習施設における実習 4日目	
5	見学実習 5	実習施設における実習 5日目	
6			
7			
8			
9			
10			
11			
12			
13			
14			
15			

履修区分	必修	単位数	3	開講時期	後期	形態	実習	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	135	対象年次	3
科目名	評価実習 ☐ 実務経験のある教員による授業				担当者	大塚 智文 他理学療法学科全教員		
使用教材	理学療法評価学 他							
科目概要	実習施設の役割や機能、各医療福祉従事者と対象者の関わりを学ぶとともに理学療法士の業務と対象者の抱える様々な問題点について具体的に学ぶ。また、学内で学んだ知識・技術を用いて対象者の評価を行い問題点を抽出した上でゴール設定を行い、治療プログラムを立案する。さらに理学療法士の業務とその範囲を理解する。4年次の臨床実習の前段階として様々な経験を積む。 理学療法士の実務経験を活かし、学生が実習を通じて理学療法士の業務内容の実際や資質を確認することを支援し、医療・福祉に関わる専門職としてのあるべき知識・技能・態度を高める指導を行う。							
到達目標	①対象者に対し問診を行なった上で適切な検査測定その他動作観察などの評価を行うことができる。 ②評価結果をもとに問題点を挙げることができる。 ③問題点に対し治療プログラムを立案することができる。 ④適切なゴール設定ができる。 ⑤実習生として対象者や実習施設内のスタッフと適切に関わることができる。 ⑥理学療法士の業務について理解する。							
評価方法 基準	成績報告書、目標シート、実習行動記録、ポートフォリオの提出を義務付け、教員による審査を行う。また、実習報告の内容についても評価する。							
成績評価の フィードバック	成績報告書とポートフォリオをもとに教員によるフィードバックを行う。							
事前準備	☐ なし ☒ あり							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	施設内実習	1.施設内見学	
2	施設内実習	2.各医療福祉従事者との関わり	
3	施設内実習	3.対象者に対する評価の実施	
4	施設内実習	4.問題点の抽出	
5	施設内実習	5.ゴール設定	
6	施設内実習	6.治療プログラムの立案	
7	施設内実習	7.理学療法士の業務とその業務範囲の理解	
8	施設内実習	以上 7 項目に関する実習を 3 週間行う	
9	施設内実習		
10	施設内実習		
11	施設内実習		
12	施設内実習		
13	施設内実習		
14	施設内実習		
15	施設内実習		

履修区分	必修	単位数	9	開講時期	前期	形態	実習	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	405	対象年次	4
科目名	臨床実習Ⅰ ☐ 実務経験のある教員による授業				担当者	大塚 智文		
使用教材	3年次までに使用した全ての教科書							
科目概要	医療施設で9週間の臨床実習を行う。臨床実習指導者の指導の下で、理学療法評価からプログラムの実施までの一連のプロセスを経験する。専任教員が適宜訪問し、学生の実習態度や実習目標達成度を把握する。 理学療法士の実務経験を活かし、学生が実習を通じて理学療法士の業務内容の実際や資質を確認することを支援し、医療・福祉に関わる専門職としてのあるべき知識・技能・態度を高める指導を行う。							
到達目標	1.臨床実習指導者の指導の下、対象者様に合わせた、評価を選択・実施することができる。 2.評価結果から統合と解釈を行い、問題点の抽出、目標設定、治療プログラムの立案を行うことができる。 3.臨床実習指導者の指導の下、対象者様に合わせた治療プログラムを実施することができる。							
評価方法 基準	成績報告書、目標シート、実習行動記録、ポートフォリオの提出を義務付け、教員による審査を行う。また、実習報告の内容についても評価する。							
成績評価の フィードバック	成績報告書とポートフォリオをもとに教員によるフィードバックを行う。							
事前準備	☐ なし ☒ あり							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	実習先により異なる	各自異なる実習先にて405時間の実習を行う	
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11			
12			
13			
14			
15			

履修区分	必修	単位数	9	開講時期	後期	形態	実習	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	405	対象年次	4
科目名	臨床実習Ⅱ ☐ 実務経験のある教員による授業				担当者	大塚 智文		
使用教材	3年次までに使用した全ての教科書							
科目概要	医療施設で9週間の臨床実習を行う。臨床実習指導者の指導の下で、理学療法評価からプログラムの実施までの一連のプロセスを経験する。専任教員が適宜訪問し、学生の実習態度や実習目標達成度を把握する。 理学療法士の実務経験を活かし、学生が実習を通じて理学療法士の業務内容の実際や資質を確認することを支援し、医療・福祉に関わる専門職としてのあるべき知識・技能・態度を高める指導を行う。							
到達目標	1.臨床実習指導者の指導の下、対象者様に合わせた、評価を選択・実施することができる。 2.評価結果から統合と解釈を行い、問題点の抽出、目標設定、治療プログラムの立案を行うことができる。 3.臨床実習指導者の指導の下、対象者様に合わせた治療プログラムを実施することができる。							
評価方法 基準	成績報告書、目標シート、実習行動記録、ポートフォリオの提出を義務付け、教員による審査を行う。また、実習報告の内容についても評価する。							
成績評価の フィードバック	成績報告書とポートフォリオをもとに教員によるフィードバックを行う。							
事前準備	☐ なし ☑ あり							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	実習先により異なる	各自異なる実習先にて405時間の実習を行う	
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11			
12			
13			
14			
15			

履修区分	必修	単位数	1	開講時期	後期	形態	実習	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	45	対象年次	3
科目名	臨床実習前評価 ☐ 実務経験のある教員による授業				担当者	大谷 知浩 他教員オムニバス形式		
使用教材	PT/OTのための臨床技能とOSCE 理学療法評価学 その他教員作成資料							
科目概要	臨床実習において重要な項目である、対象に対する接遇、理学療法評価技術ならびに臨床推論や治療技術について一連の流れとして理解し、実施できるよう学内での実習を行う。 理学療法士の実務経験を活かし、学生が実習を通じて理学療法士の業務内容の実際や資質を確認することを支援し、医療・福祉に関わる専門職としてのあるべき知識・技能・態度を高める指導を行う。							
到達目標	①対象者への説明を含めた接遇面での配慮が円滑にかつ丁寧に行える。 ②正しい方法で評価を行いその結果から対象者の全体像を捉えることができる。 ③問題点の抽出からプログラムの立案を適切に行うことができる。 ④プログラムを正しい方法で適切に実施することができる。							
評価方法 基準	実技試験を行い総合的に判断する。							
成績評価の フィードバック	試験採点後、点数と内容について個別に説明するとともに口頭または実技を交えながらフィードバックを行う。							
事前準備	☐ なし ☒ あり							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	バイタルチェック・問診	バイタル測定および問診実技	
2	感覚検査・反射テスト	感覚および反射についての実技と解釈	
3	筋力測定・筋力訓練	筋力測定およびトレーニングの実施実技	
4	関節可動域測定・訓練	可動域の測定後拡大訓練の実施	
5	各形態測定	四肢長・周径を測り推論を立てる	
6	疼痛検査	疼痛検査実技と解釈	
7	ADL評価	BI・FIMでの評価実施と解釈	
8	筋緊張検査	検査実施と解釈	
9	脳神経検査	各脳神経検査の実施と解釈	
10	高次脳機能検査	各高次脳機能検査の実施と解釈	
11	協調性検査	協調性検査検査の実施と解釈	
12	整形外科的テスト	スペシャルテストの実施と解釈	
13	各動作分析	動作分析からの問題点の抽出	
14	起居動作訓練	起居動作自立に向けた訓練の実施	
15	移乗訓練	移乗動作自立に向けた訓練の実施	

回	単元	内容	備考
16	起立・立位バランス訓練	歩行獲得を目指しバランス訓練を行う	
17	歩行訓練	歩行自立を目指し歩行訓練の実施	
18	スタンダードプリコーション	感染予防策の理解および実施	
19	促通手技	主に片麻痺患者に対する治療の実施	
20	片麻痺機能検査	脳卒中片麻痺患者の機能評価実施	
21	統合と解釈	評価の結果から全体像を把握する	
22	プログラムの立案者	理学療法プログラムを立案する	
23	コーチング	対象者の意欲向上スキルを身につける	
24			
25			
26			
27			
28			
29			
30			

履修区分	必修	単位数	1	開講時期	後期	形態	実習	
開講学科	理学療法学科（夜間課程）				配当時間	45	対象年次	4
科目名	臨床実習後評価 □ 実務経験のある教員による授業				担当者	大谷 知浩 他教員オムニバス形式		
使用教材	PT/OTのための臨床技能とOSCE 理学療法評価学 その他教員作成資料							
科目概要	臨床実習で重要な項目である、対象に対する接遇、理学療法評価技術ならびに臨床推論や治療技術についての一連の流れを臨床実習を経験したことにより、理解し、実施できることを前提に学内での実習を行う。 理学療法士の実務経験を活かし、学生が実習を通じて理学療法士の業務内容の実際や資質を確認することを支援し、医療・福祉に関わる専門職としてのあるべき知識・技能・態度を高める指導を行う。							
到達目標	①対象者への説明を含めた接遇面での配慮が円滑にかつ丁寧に行える。 ②正しい方法で評価を行いその結果から対象者の全体像を捉えることができる。 ③問題点の抽出からプログラムの立案を適切に行うことができる。 ④プログラムを正しい方法で適切に実施することができる。							
評価方法 基準	実技試験を行い総合的に判断する。							
成績評価の フィードバック	試験採点後、点数と内容について個別に説明するとともに口頭または実技を交えながらフィードバックを行う。							
事前準備	□ なし ▣ あり							

授業計画

回	単元	内容	備考
1	バイタルチェック・問診	バイタル測定および問診実技	
2	感覚・疼痛・反射・検査 及び形態測定	感覚・疼痛および反射、形態測定についての 実技と解釈	
3	MMT・ROMT及び訓練	MMT・ROMT・筋力訓練・可動域拡大の実施 実技と解釈	
4	ADL評価	BI・FIMでの評価実施と解釈	
5	中枢神経系の評価	筋緊張・脳神経・高次機能・協調性などの検 査実施と解釈	
6	整形外科的テスト	スペシャルテストの実施と解釈	
7	動作分析	動作分析からの問題点の抽出	
8	起居移乗動作訓練	起居移乗動作自立に向けた訓練の実施	
9	起立・立位バランス訓練	歩行獲得を目指しバランス訓練を行う	
10	歩行訓練	歩行自立を目指し歩行訓練の実施	
11	中枢の知識 1	中枢神経疾患の画像の診断について学ぶ	
12	中枢の知識 2	中枢神経疾患のそれぞれの特徴と治療法につ いて学ぶ。	
13	中枢の知識 3	中枢神経疾患の評価法や各種検査法について 学ぶ。	
14	整形外科疾患の知識 1	代表的な整形外科疾患の病態と症状を理解す る。	
15	整形外科疾患の知識 2	代表的な整形外科疾患の画像を学ぶ。	

回	単元	内容	備考
16	整形外科疾患の知識 3	代表的な整形外科疾患の治療について学ぶ。	
17	呼吸の知識	呼吸器の知識と各疾患、その治療を学ぶ。	
18	心臓の知識	循環系の知識と各疾患、それぞれの治療を学ぶ。	
19	代謝疾患の リハビリテーション	代謝疾患（糖尿病）の理解とその治療について学ぶ。	
20	統合と解釈の方法	各評価項目から考えられるアセスメントを導き出す事ができる。	
21	ゴールの設定について	問題点とゴール設定プログラムのつながりや予後予測を含めたゴール設定について学ぶ。	
22	プログラムの立案・実施	それぞれの疾患のプログラムを立案実施できるようにする。	
23	コーチング	メディカルコーチングを学び患者の意欲向上スキルを学習する。	
24			
25			
26			
27			
28			
29			
30			